

家庭・保育所・幼稚園

幼児の教育

10



館 紅・著

B6判・180頁
定価850円 ￥160円

絵本 その楽しさと指導

なぜ子どもたちに絵本を与えるのか。絵本によって何が育つのか。絵本のもつ役割について、著者の豊富な保育現場の体験を通して語られています。

子どもの危機

●自然にかえれ！といわれるが――

海 隼子・著

B6判・232頁
定価850円 ￥160円

●指先がつたえる 子どもの心――
清水えみ子・著

B6判・232頁
定価1,000円 ￥160円

せんせいつかまえた！

子どもの指先、手の平の表情から子どもの心がよみとれると気づいた著者は、顔や体の表情と同時に指先をみつめる訓練をしました。それで子どもとの間によりたしかな心のつながり、心と心の対話をもつことができました……。

幼児の教育

第七十八卷 第十号





幼児の教育 目 次

—第七十八卷 十月号—

表紙 油野誠一
カット 中島英子

© 1979
日本幼稚園協会

ながら族……………外山 滋比古…(4)

小さな幼稚園

—私の生き方を求めて—

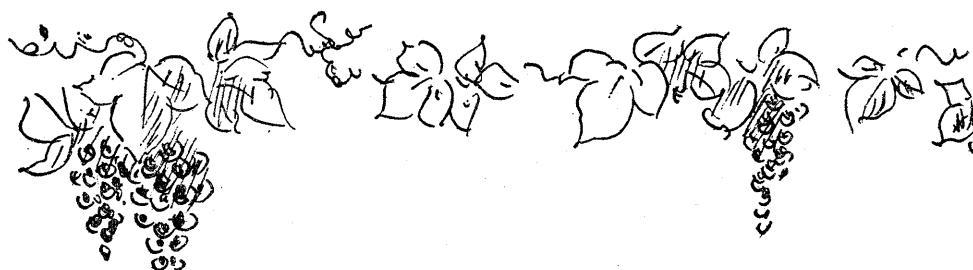
大堀容子…(6)

ルソーの夢

—むすんでひらいて考— (その十三) ……海老沢 敏…(13)

「幼児の教育」復刻記念賞論文募集

高層住宅での保育……………八森佐知子…(22)



- 高層住宅に住む子どもたち 近藤千恵子 (24)
- 高層住宅と子どものあそび 林 美智子 (26)
- 西洋長屋の浪人 竹内 良雄 (28)
- 中高層住宅と育児 星 美智子 (30)
- 『さわらび』から学ぶこと 関口はつ江 (35)
- さわらびの 春を求めて 野を歩く 斎藤 美和 (39)
- いどもと共に生きる 森岡 和子 (42)
- 遊びと子どもの発達① 〈顔・手・指の遊び〉 加古里子 (48)
- ◇園長室の窓から 原口 純子 (52)
- 水と子ども 川上 美子 (58)

ながら族

外山滋比古

長崎で幼稚園の園長をしているというドイツ人神父に会つた。

子どもの教育はまず母親からという考え方でお母さんの勉強会を始めた。ところが、すこしもうまく行かない。欠席する人が多い。来た人の中には居眠りする人もある。神父さんは悩んだ。どうしたら熱心になつて聞いてくれるか。

そのうち、スライドを見せるようになつたら、急にみんなの目が輝き出した。味をしめた園長さんは、こんどはN H K テレビの「大きな草原の小さな家」をビデオにとって見せた。これが大当たり。出席者がふえ、乗り出すようになって見る。それだけでなく、講話も真剣にきいてくれるようになつた。

神父さんは、こういう結論に達した。お母さんたちに話

をしようと思ったら、何か見せなくてはいけない。ただ話をだけ聞かせると、コッククリコッククリやり出すか、来なくなつてしまう。

布教ということに命をかけて生きてきた人の觀察はさすがだと思った。女人人は、話だけきかせては、ダメなのである。私もこのごろようやくそれがわかりかけてきていただけに、この神父の話に共鳴した。

どこの女子大でも、教室の学生が私語するのに困っている。叱つても叱つても、かならずしゃべるのがいる。外へ出て行け、というようなことを言うと、さすがにその時間だけは黙っている。しかし、聞いているのではない。声にならない声でおしゃべりをしているのだ。

せつせとノートをとっているのはしゃべるかわりに手を

動かしているのかもしれない。ノートをとらないで、しきりにうなづくのがいる。新米の教師は、それを、よくわかつて、話の内容に賛成を表明しているのだなどと誤解する。そんなのではない。ただ、首を上下に動かしているだけで気が休まるのだ。まるでわかつていなくても、"そうですね"というところへ来ると、条件反射的にコクリとうなづく。

考えてみれば、学生もかわいそうだ。殺風景な教室である。黒板には小さない字が並んでいる。その前に貧相な机があつて、いつそ殺風景な教師が立っているだけ。そんなものを一時間も二時間もにらんでいられますか、ついうんですよ。彼女たちはそう思つていてるに違いない。

せめて、おしゃべりでもして、うつとうしさを忘れたい。書くことはないけれど、字を書いていれば、気がまぎれる。コクリコクリうなづいていれば時間がたつてくれる。さもなければコックリコックリ居眠りの船でもござはかはない。

そういうのが、数年すると子を生む。そこからおきは想像を越える。

いつか小学校一年生のクラスを参観した。お母さんたち

が参観している。おどろいたのは、母親たちが勝手にしゃべっていることだ。あまり腹が立つたから、新聞にこんな親は授業参観をする資格がないと書いた。すると方々から反論が来た。もちろん同類の母親からである。それぞれ原因にならない原因をあげているが、教室の学生のおしゃべりと変わらないと思つたから黙殺した。

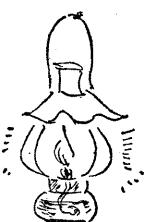
女性はどうやら、生れながら、ながら族のようである。ひとつのことだけでは満足しない。同時に二つのことをしてちょうどよい。そのところを、いまの学校はハキ違えている。私はこのごろそういうふうに考えるようになった。そういうお母さんが、こどもを育てる。こどもがながら族になるのは当たり前であろう。私は、別に、ながら族が悪いと言つているのではない。いまのような複雑な世の中では、ひとつのことにつか注意が向けられないという集中型ではかえって不都合が多い。

ただ、問題は、ながら族をいかにして、精神統一へ向わせることができるかである。長崎の神父さんはビデオで成功した。われわれもそれで行くか。

(お茶の水女子大学)

小 さ な 幼 稚 園

—私の生き方を求めて—



大 堀 容 子

「小さい幼稚園を開園します。五歳児より

三歳児、二十名募集」の小さな看板を近所の埠や店頭に貼り出してスタートした「ひ

こばえ幼稚園」も、もう三年間が過ぎてしまつた。現在は、五歳児十四名（障害者二名）、四歳児十一名、三歳児一名と私と若いがすばらしい保育センスを持った保育者が一名で共に生活している。

保育施設としては、土地が七十坪余りのところに二十坪の保育室、二坪の砂場と馬の形をしたジャングルジム、鉄棒一台があるのみである。公道から三十メートル入つた私道の一番奥に園舎があるが、私道も園庭の一部のように使える。又二階の私宅の一部も五歳児や母親の集会等にも使用するが、広い庭と家屋を持っている農家が多い

土地柄に狭い保育施設を建てたのだから、人々はとても驚いた。しかもこの東京都西部にある福生市では一番歴史のある教会

附属の幼稚園（園児数七十名）が狭いということ、通園バスもなく保育時間が短いこと、給食もないこと等で、園児も集まらず廃園するという噂の中で、それよりもつと悪条件の未認可の保育施設を開園したのだから笑い者になつた。

入園希望の母親も「勇気がある、名もな
い悪条件の幼稚園に大事な子どもを入園さ
せるなんて」とまで言われたとのことであ
ったが、二年前までは園児も集まらず考え
込んでしまった。確かに、東京都の学事課

の方も、公認に準ずる施設としては、保育
内容は理想的でも、運営規模が小さく、保
育料も安くては保育施設として継続性がな
いと指摘され、認められなかつたのだから、
世間一般の人々に受け入れられないのは
は当然なのかも知れない。

しかし二十年間幼稚園に通いながら何か
しら中途半端な気持と大勢の子ども達や母
親とじっくり交わることのできない不器用
さが、いつも心のしこりとなり、完全燃焼
しきれないもどかしさを感じていた。四十
歳を機に、これから十五年間与えられた
私の力を充分發揮し、完全燃焼するにはと
散々考えた結果「小さな幼稚園」にたどり
ついたのである。

*

東北の片田舎で、父母がその土地で教師
をし、教え子との交わりにどっかりと根を
張つて生きているのをみながら育つて来た
私には、父母のように、私自身が幼い子ど
も達の家庭をとりまく地域社会の一員な
だから、そこに生きる人々の生活習慣や風
俗や自然環境を充分に知り、共有しながら
その地域に根づいた保育をしてみたい。又

就学前の三年間だけ交わるのでなく、大人
になつても交わり続け、お互いに協力し、
助け合うことができたら理想的で、この多
摩川の水と緑を愛し、いろんなことを心か
ら受け止め、共に喜び、泣き、憤つてみた
い！たとえ経済的な苦しみがあつても、
それ以上の精神的な満足感があつたら乗り
越えられるだらうと。

そして現在、公民館に集まつてサークル
活動を続いている若い母親と、子どものこ
とにについてや、集団保育について語り合
い、交わりを持っている。料理講習会でも
園児の母親ばかりでなく、近所の人々にも
参加してもらい互いに教え、教えられる場
にもなりつつある。又今晚のおかずは何に
しようかと店の前で互いに考えながら知り
合つた人から、「来年は三歳になるのでお
願いします」と気軽に声をかけられ、こう
した日常的なかかわりの中で、近所の太つ
ちよのおばさんであり、先生である人のと
ころに入園するのですから、子どもも緊張
感も不安も少ないようである。

ましてや入園式のセレモニーは一切なし
で第一日目から遊んで、おみやげに手づく
りのケーキをもらつて帰るのだから、翌日
から一番乗りを目指して登園していく子ど
も達で賑やかである。園の行事も市の公園
や体育館を利用したり、土手や川原での草
つみ、虫取りをしたりと身近な所で楽しん
でいる。自然や人的環境も、自分達のかか

わり方で、心豊かにもなることを知らせて
いるが、一年毎に理解者も増えて、入園希望者も多くなつた。又、近所の人々からの教材の提供もあり、まわりからの協力に感謝している。

*

「小さな幼稚園」を作るにはもう一つの動機があつた。それは、二、三年前の新聞に、今年の新入社員は「人工芝型」と命名された記事があつた。内容はうる覚えであるが、新入社員の研修に講師で出かけられた先生が、新入社員は身だしなみや、お行儀がよく、お仕着せのトレーニング・ウエアをきちんと身につけ、講義にも熱心に耳をかたむける。なんとも文句のつけようがない優等生ぞろいであるがしばらく観察していると「若者のものつどろどろしたものが多く、いかにも若年寄り的だ」そこで思ついたのが人工芝のイメージ。とにかく

外見からみれば芝目がそろつた粒ぞろいに映える。しかし、あれは人工美で本物の美しさではない。雑草は生えないかわりに新芽も育たない。すり切れても、はえ変わる根性がない。「皮めくれば下から硬いコンクリートが出てくる………と。

私の知つている幼稚園でもこの「人工芝型」の人間を育てている部分があるのではないか。お行儀をよくしましよう。先生の言うことに、指示に従いなさいと保育者側が管理しやすいようにと規則々々でしばり、ピット笛を吹けば一列にびっちりと並ぶように訓練し、「どうですこんなに上手にきれいに並べるでしょう」と自慢する園長先生、制作展と称して、おしきせのしかも教師の手伝いがおもな制作品を並べて「私の幼稚園はこんなに教育熱心なのです」と鼻高々の保育者をみていると何んだか子ども不在の現実をみせられ、新芽も出ない不毛のコンクリートの心しか持ち得なくな

る子どもを育てることに加担しているのではないかと思い、じつとしている。十人十色といわれ、一人一人の顔かたちも違ひ、育つている環境も異なり、従つてその一人一人のあり方も異なる人間がどうつながつていくのか、どういうふうにしたら疎外しあわないので、互いに仲良く、いつしょに食事をしたり、歌つたり踊つたり、働いたりできるのか、毎日の子どもと母親との関係とか、父親と母親、あるいは祖父母との関係といった非常に具体的な人間のかかわりの中で、その子ども自身が「生きる」ことを体得していくのではないか。

そして、もう一步進めて、同年齢かそれにはちもん、他の子どもの能力も認め合いで、強さも弱さも知った上で協調し、思いやつていく人間性が育つて行くようにしなければと思つた。しかし、従来の一クラス

四十名近くでは、表面上の交わりやきれいなことや、そして、ちょっと見のよさだけである一律に平等にという考え方が先行してしまうだろう。

幸い夫と共に働き、小さな土地と家を求めて生活していた基盤がある。そこに大がかりな施設でなく、人数も二十名前後で生활する場を作った方がいいのではないか、という思いが「ひこばえ幼稚園」の誕生でもあつた。保育について、学問的な理念があつたものではなく、私が私らしく生きたいという願いが、この「小さな幼稚園」を設立した動機でもあるから、教育の公共性ということや、文部省の設置基準からお考えの人々にはお叱りを受けることを覚悟している。

*
発的な遊び」を生活の中心にしている。インスタントでなく、小さな園にふさわしい手作りの教材・教具を用い、日常生活で捨てられてしまうような空箱やビンのフタ・広告紙等も集めて製作の素材とし、三歳から五歳までの子ども達が、朝の八時三十分から午後一時三十分まで、一人一人が自己を充分に發揮し、満足できる生活ができるよう試みている。午前中の三時間近く、それぞれの遊びに没頭する子ども達を見ていると「人と人との間で生きること」の厳しさをのり越えて、たくましく生きる力を持っていることを知らされ、私自身の生き方を教えられることがしばしばある。

ここに昨年五歳児クラスを担任した藤本菜穂子が、卒園にあたって書いた文章があるので紹介する。

幼稚園生活歴のちがう五人です。この一年というものは、生れてはじめて五人が、「ひこばえ」という同じ艦に乗つて生活してきました。（中略）夏休みのキャンプで共同生活を経験し、カレーライスもつくり、きもだめしもして、九月に会うと五人がずい分大きくなつてしまつたね。山組どうしの会話の豊かさに感心したのもこの頃でした。遊びも、野球、かんけりなどルールのあるものへと変わつてきました。小さい子への配慮にもなかなかやさしい心づかいがあつて、遊びを教えることにかけては、大人も及ばない何かすばらしいものを感じます。しかし同時に大人びてきて分別くさくなり、正面からぶつかってケンカすることが少なくなったのです。心の中では、クソッと思つていて、口の中でブツブツ言つたり、グッとガマンしてみたりするのです。ちょうどプレーデーの頃、共同製作

開園以来、幼い子ども達が、ほんとうに子どもらしく「生きる」ことを願い、「自

山組。男の子五人だけでスタートして、もう一年。同じ五歳児でも一人一人

でパズルをつくったのですが、五人ともあまり自己主張しないのです。そしてなぜか口をとざして黙々と絵を描くのです。私はあせりました。こんなはずじやない。もうと言いたいことを言つてほしい。堂々とケンカをしてほしい。ほんとうに互いが心を開きしていやなムードでした。

三学期に入つて何かが少し変つてきました。山組の五人がいつしょに遊ぶことが多くなりました。ところが、ここでもたしつくりしないムードがでてきたのです。野球をしていてもいつの間にか一人ぬけ一人ぬけしてゆくのです。やめないで、自分の言いたいことをはつきり言つて！ にげるのは男らしくない。変にケンカをさせていた五人に私は、乱暴にも山組はもう解散すると言つてしましました。こういうのってきらいなの。するとなんということでしょうか。五人は深刻

な顔で話していました。そうしてもう一回いつしょに遊び始めました。そして次々とケンカが起きました。KとYがぶつかった時、二人ともやしさ一杯で別々のところで一人で泣きましたね。そのあとAとYは、なぐり合いをした日もあり、お互いにぶち合っているうちに泣いていつの間にかおかしくなって笑い出してしまいました。とにかく、このケンカの時期に実にすばらしい男の世界みたいなものを感じました。決してケンカを奨励するものではないのですが、自分の主張を正々堂々とできるようになって本当に良かつたなと思うのです。

M子は、身体も大きく、かわいい表情としきで、ピンクレディの歌をうたつたり、ままたが大好きで、いつもお母さん役をするリーダーでもあつたが、今年の四月以来、心を開きし一人で二時間でも三時間でも、女の子の絵を同じパターンで描いたり、空箱を紙でつつみ、自分のロッカーカーの整理に余念がなく続けられていた。

五月の下旬、「絵本を作る」ということで白紙を十頁綴じてあげる。すると一日がかりで絵と文を書いたのである。「一人では淋しい。お花とおはなししてみよう。さびしいね。どうしようか。だれか友達つれてくればいい。大きい花、小さい花きれいだね。友達が遊びようと言つた。なにして遊びようか」とページを追うごとに友達と遊びたいという気持ちがり上がったのだろうか。描き終つた翌日から友達の中に入つて行つた。しかし、

三か月余りのうちに、今まで M子に従順に従つっていた仲間は、自己をはつきり主張するようになつてしたり、新しい交友関係ができる楽しそうにしている。以前の M子との関係は跡形もない。

M子は、今度は事ごとに攻撃的になり、ののしり、つねる等回りの子ども達を不愉快にすることばかりが続いた。その都度、保育者も振りまわされたが、ある時、真正面から、M子の態度に腹が立ち怒つてしまつたが、五分後、二人で砂場にどつかりと座つて無言の行を三十分続けたこともあつた。そして絵本を作つて十日過ぎた六月中旬頃からは、新しい人間関係の糸口をみつけて、笑顔が多くみられた。

この様に小人数なるが故に逃げ場のない厳しい人間関係から一段一段と確実に成長するたゞましい子ども達である。

*
小人数ということは、家庭的な味わいとどうか、子どもをとりまく家族の人々との交流が園を媒介として発展もしている。子どものおばあさんに、赤飯の焼き方を教わったり、ゆかたや袋物の縫い方を教わったりする若い母親。小学校が休みの時は、お兄さんやお姉さん達がおべんとう持参で一日中小さい子どもと遊んでいく。母親達も手づくりのクッキーや郷土料理の菓子を作つて子ども達のおやつにと持つて来て一緒に食べることも多くあり、特に、みんなで作つて食べるることは人数が少ないとよく催される。もち草を摘んでの草だんごやクッキー、カレーライス作りは、子ども達の得意な料理である。

施設の面でも狭いので、ブランコ、スペリ台等はないが、ダンボールや板、積木、つな、座布団等を使い、いろんな場所にい

るんなスベリ台やブランコができる。その時々みんなの知恵と力を出し合つて作るのですから、既成の遊具にはみられない生き生きとした楽しみ方をしている。それから、ゴザを垣根の側や軒下に敷いて、草花を使ってのままごとあそびが展開されたり、ボール遊びや紙飛行機とばし、タコあげ等四メートル幅の私道は、路地あそびには恰好の場である。隣家にボールや紙飛行機が入れば「スマミセン・ボールとらし」て下さい」と大きな声で断わることも忘れないのだが。
*
今年度の入園児四名のうちの一人の母親から次の様な便りが来た。

うなんだろうかと思つて好奇心まじりだつた私も、何回か通つて子ども達と接するうちに、子ども達の持つ底知れない力に驚きもし、感動したものでした。それは一人一人の子どもが本当に一個の人間として存在しているということでした。そのあたり前といえばあたり前のことが、ここでは、とても大切にそして自然に行なわれているということでした」

歳児には年長児のまとまつた活動は刺げきが強く、強烈な印象があり、いつもお姉ちゃんやお兄ちゃん達のようにしたいといふ要求が強く、三歳児なりの模索する経験が少ないようと思われる。そして、その強烈な印象をうち破つて自分なりの遊びに入るには時間がかかるように思われる点である。

あるが、それによつて子ども達を踏み台にしてはいけないと絶えず祈りながらの毎日である。

(東京・ひこばえ幼稚園)

*
母親も交替で園に来て子ども達と遊ぶことになっているが、回数を重ねることに、母と子の密着した関係では触れ得ない何かをつかんでいく様である。

第二の問題点は、保育者二名を軸にはしているが、いつでも誰でも出入りができる点である。これはまわりの大人から愛されているということを知らせるねらいで始めたが、大人の不用意な言葉や態度で、夢中になつていた遊びに水を差したり、子どもとの理解を越えた大人側の概念を押しつけたりして、子どもの遊びたさをつみ取つてしまふ事がみられ、しまつたと思うことである。

*
しかし、問題点も沢山ある。第一に先着順の入園許可ではクラス別の人員構成のバランスが取れないと。これによつて、五歳児が多く、三歳児が少ない場合には、三

まだまだ今後に残された課題は沢山あるが、私自身の生き方を求めての小さな試み

ルソーの夢

—むすんでひらいて考— (その十三)

海老沢 敏

九、ルソーの夢変奏（承前）

『揺籃讀美歌』のテキストの作者は、英語讀美歌作者としてその歴史に名高いアイザク・ウォッツ（一六七四—一七四八）である。『ウォッツ博士』の名で知られ、かつ『英語讀美歌の父』と称されるこの詩人は、フランスのユグノー教徒系の母親をもち、彼女は聖バルテルミーの大虐殺の折に、英國に難を避けた家系に属していた。サザンプトンに生れたウォッツは幼ないころからラテン語の詩を作り、古今の語学に才能を發揮したといわれ

る。旧来の詩篇歌による礼拝に満足しえなかつた彼は、長じてから無数の珠玉のごとき讀美歌を作り、『英國に現われた最初の、そして最大の讀美歌作家』^(注4)と言われるにいたつたが、病弱かつ風辛に精彩なく、五尺ほどの短身であつたと伝えられる。彼が作った讀美歌は六百ほどにのぼり、そのうちの二十篇ほどは邦語でも歌われ親しまれてきたものであった。たとえば邦語讀美歌第百二十九の『さかえの主イエスの十字架をあふげば』などを挙げるこ

(注4) 津川主一著『讀美歌作家の面影』(教文館・昭和十六年(再版)、八二ページ)

このウォツツは「小児のための讀美歌を創始した人」ともいわれている。生涯、家庭というものを持つ仕合せには恵まれなかつたウォツツは、こうして幼な児たちのために、神をたたえる歌の数々を残したものであった。そうした作品の中で、とりわけ名高い詩こそ、彼の死後に、『グリーンヴィル』の旋律を与えられ、十九世紀の英語圏のもつとも典型的な〈揺り籠讀美歌〉として親しまれていたのだ。第二節および第三節も訳出しておくべきであるう。

お前の揺り籠はやわらかくて氣持がよいけれど
お前の、救世主のお休みになるところはお粗末でかたい
御誕生のところは厭だつたし
干草がそのとてやわらかいベッドだった
ああ、不思議な物語を物語り
彼の敵たちが、彼らの王をどんなに罵り
彼らが栄光の主をどのように殺したかを知ると
歌いながら私は腹を立てる

しーっ！ 私の子供、私はお前を叱りはしなかつた

私の歌はとてもかたく見えるけれど

お前のお母さんはお前の傍に坐り

その眼はお前を守つてゐる

お前は主を知り、主を怖れることを学び

生涯主を愛し、主にお仕えするのだ

そして永遠に主のかたわらに住まい

主の愛を語り、主の讀美を歌うのだ

(注5) 津川主一著、前掲書八七ページ。

『フランクリン・スクエア歌曲集』の編集者マッカスキーは、この『揺り籠讀美歌』に注釈を加えて、次のように語つてゐる。
「子守歌」——さる現今の著者は次のように語つてゐる。子守歌、あるいは私の子供たちが好んでそう呼ぶように、眠り歌の主題はけつして平凡なものではないし、『求む——子守歌』と題されたさる記事に私の注意が惹きつけられるまでは、私は英語では子守歌には不足していないものと想像していたのだった。私の蔵書の中には、フランス語でもドイツ語でも、また英語でもこうした(眠り)

歌や夢の歌が沢山あつたので、眠れない子供をなだめたり、氣むずかしい赤ちゃんを慰さめたりすることで困ることはけつしてなかつた。私にとって眠り歌、あるいは子守歌の極致は懐しくも善

良なウォッソ博士の『揺り籠讀美歌』である。節は歌詞ともども

私に伝えられたが、それは幼な児の眠りの中で私の疲れた眼が答え、それによつて落ち着きもなく苦しんでいた私の氣むずかしい悩みが慰さめられたものだつた。私はかつて、これを自分の子供たちに使つてみたが、眠たい時間のコンサートのはじめに歌われるものがたとえなんであつたにしても、最後はおちるんへしーつ！

いといし子、静かに横になつて、おやすみ！ あつた。私がほん

とに幼ないこゑに、第二節の最後の二、三行が歌われたとき、小さな脚輪つき寝台に横になつた私の幼な児のよくな心に与えられた印象は、けつして満すことのできないものであつた。しばしば、私はあまりの感動で、それらの歌行をそつと歌い、次の詩節をもつと大きな声で、しかもはつきりと歌つて、そうした悲しみの感情を少しほは追いかけてくれるよう頼んだものであつた。最終節をしめくくる三三行は、かつては、幼な児の頭に降つてくる祝福のことばのように思われた。この、私自身ならびに子供たちにとつての『歌の中の歌』が結ばれた曲は、やさしくも悲しげなものであつて、歌詞によく合つていた。それは長い間英語を話す

世界中の家庭で人気のあつた子守歌であつた。(注6)

（注6）『Franklin Square Song Collection』1111ページ。

マッカスキーは、この曲をかねに「連想によつて私は神聖なものである」と語つてゐるが、ウォッソ作詞のこの幼な児のための讀美歌が、『ルソーの夢』の旋律によつて、十九世紀にはひらく親しまれ、母親の愛情深い親密な声によつて歌われ、彼女たちのいといし幼な児たちの耳に、そして魂の中に深く染み入つていつたことが理解されるのである。

神の祝福、主イエスのやさしい慰さめは、幼な児の中に、この『ルソーの夢』のひびきのかたちで、深く刻み込まれたものであつたが、さらにそれにとどまるものではなかつた。人びとの心に刻みつけられるその様態は、さらに多様なものであつた。幼な児の心に記憶されるものが『子守歌』だとすれば、民衆の心に刻みこまれるのは、ほかならぬ民謡であり、そしてまた嬰児の年齢を越えた子供たちの肉体と心を捉えるのは遊び歌、遊戯歌であろう。『ルソーの夢』は、英語圏の民衆たちとその子供たちによつて、こうした初源的な歌としてもひろくひろまつていつたものであつた。その二、三の実例をこゝで紹介してみよう。

アメリカ合衆国に移住した英語系の人たちのあいだでひらく歌われていた歌に、《タビーおばあんに言つとふや、灰色の年寄りがチョウが死んだつて》という歌がある。これは《タビーおばあん》のかわりに、《ナンシー》、《ロジー》、《ロディー》、《エリュー》、《ベッキー》等々とそのシーンに応じた固有名詞を入れかえねじがであるが、いやれにしてや、アメリカ東部を斜めによぎるアペラチア山脈の山地に生きる住民たちが好んで歌い楽しんでいたものであった。こうした遊戯歌は、一九三〇年代にやまとまだかたちで採集され、当時の文献類に収められている。
そのひとつはジヨーリ・ベン・ジャクソン著《南部高地の人靈歌》(一九三一年)に収められてゐる。(譜例③)

(註一) George Pullen Jackson《White Spirituals in the Southern Uplands. The Story of the Fasola Folk, their Songs, Singings, and "Buckwheat Notes". (Chapel Hill, The University of North Carolina Press, 1933.) 1711%—》。

著者は、ルードルフの《タビーおばあんに言つとふや Go tell Aunt Tabby》が流行のタイプのひとつであつて、南部では、歌い手が歌手でたゞてや、みんなの節を知つてゐるやうだとい

語つてゐる。著者はわらひ、この節の作曲家がルソーとされてゐるが、それはほかならぬジョン・シャックであり、事実、れる著者はこれをその伝統的な名前のルソーの夢で名指していると指摘するのだ。その上で、やるに別の著者による讀美歌式では、この旋律がJ・B・クラマーなる人物によつて「つかまえられ」、「一八一八年」と、変奏曲へのピアノ独奏曲として(おそらくは英語ド)出版された」と記述されている。わるいのである。ジャクソンはクラマーがこれをどうで「つかまえた」のかわかられば面白く語つてゐるが、

▼ 譜例 ③

Go tell Aunt Tab - by, go tell Aunt Tab - by.
The one she was sav - ing, the one she was sav - ing, The

Go tell Aunt Tab - by Tab - by the old grey goose is dead.
she was sav - ing to make a feath - er

GO TELL AUNT RHODY

Verses selected and tune written down by Richard Chase

I. Go tell Aunt Rho - dy, Go tell Aunt Rho - dy,
Go tell Aunt Rho - dy, The old grey goose is dead.

2. The | one that she's been | saving (3 times)
To | make a feather | bed.
3. | She died in the | mill-pond
| Standing on her | head.
4. The | goslings all are | cry-en
To | think their mother's | dead.
5. The | gander is a- | mourn-en
Be- | cause his wife is | dead.
6. The | barnyard is a- | weeping
| Waiting to be | fed.

譜例④

(注8) 前掲書、一七四ページ。

この『ルソーの夢』から導き出された『タビーおばさんに言ひと
いで』は、さらにいくつかの稿で歌われていたらしい。
(注8)

同じく一九三〇年代に、この民謡化し、遊戯歌化した旋律を採
集したのはリチャード・チャーチ・エイースであった。

エイースの編集した『昔の歌と歌唱遊戯』は、その冒頭に、『ロ
ディーおばさん』に言ひておいで *Go tell Aunt Rhody* を掲げ
ているが、さらに歌詞の異稿を六つほど示している。(譜例④)。
いずれもガチャヨウの物語である。(図版①)

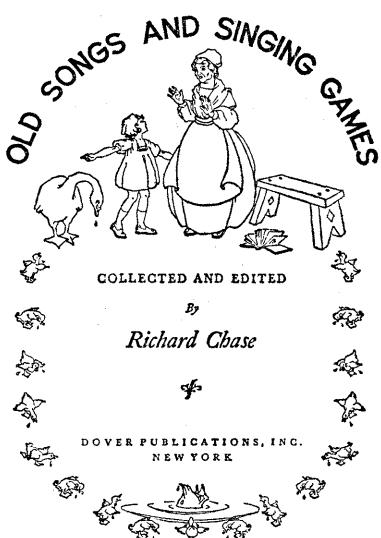
1. ロディーおばさんと云ひて

灰色の年寄りガチャヨウが死んだって

1. 助けてやったあのガチャヨウを
羽入りベッドを作るうと

1. そいつは貯水池で死んだ
田の前の貯水池で

◀ 図版 ①



(注) Richard Chase (Collected and Edited by) «Old Songs and Singing Games» (Chapel Hill, University of North Carolina Press, 1938; [新訳] New York, Dover Publications, 1972.)

- 四、ガチャウの子供はみんな泣かせんや
お母さんが死んだい限り
五、ガチャウの雄は悲しんでる
カカアが死んじまつたんで

六、納屋のおねつの庭じゅうが泣いてる
餌をやめただがい

ないだろう。彼はこの『ロディーおばさんに言つといで』のページを次のように結んでいる。「この単純な旋律のはじまりがなんであろうとも、それはこうした詩句でそれを用いることで、私たち自身の口伝えの中で私たちに親しいものとなつたのである。」

(注10) 前掲書、三ページ、四ページ。

私たちは、こうして、『ルソーの夢』が、そうした本来の名称を離れながら、讃美歌から、さらに地上の天使たちのための歌、そしてさらには、子供たちの生活の歌、遊戯の歌として、そのおだやかな旋律線のもつ不思議な魔力の呪縛をつよく保ちつけながら、変容し、生きづけていったことを知るのである。それは英國から、さらにその言葉が力づよく生きづけていった新大陸アメリカへともたらされながら、さらに新しい生命力を獲得していくものである。

それでは、この『ルソーの夢』はそうした不思議な変身を経験するにとどまつたものであろうか。この旋律は、さらになお、意識的な教育実践の場で、子供たちの肉体と心を導く歌として、身体運動と、そして魂の動きをひとつに結びつける印象深い音楽としても積極的な位置づけを与えられるのである。こうした『遊戯

歌』としての『ルソーの夢』の命運を語る前に、しかし、もうひとつ別のかたちの『ルソーの夢変奏』について、つけ加えておく必要があるだろう。

(国立音楽大学)

*

*

*

『復刻・幼児の教育』

『幼児の教育』一巻～二十巻までの復刻が完成しました。

つています。

「我国教育界の刻下の急務は、児童教育法の研究と、母としての婦人教育の普及にある」とうたい上げた創刊号を手に

すると、当時の関係者たちの熱い息吹きが伝わってきます。

明治三十四年、保育界は、創設の混沌の中から、漸く、新しい傾向をつかまえかけていたのでした。

そして、巻を追うごとに、日本の保育の成長の道すじが明
きらかになってきます。それは、大正期へ向けて徐々に夢を
あくらませ、やがて、「誘導保育」という形で華麗な花を開
かせていくのです。

従来、この雑誌は完全な揃いがなく、閲覧の困難さが歎か
れていましたが、この度、関心を抱く多くの人々の傍におか
れるべきものと考え、復刻刊行に着手致しました。過去を問
い、現在を考える手がかりとして、広く活用されることを願

全二十巻、別巻一、A5判、クロス装、外函入、題字・東山

魁夷、別冊記念論集

『一巻～二十巻』『婦人と子ども』明治三十四年～大正七年

『幼児教育』 大正八年～大正九年

編集委員 津守 真

本田 和子

堀合 文子

〔刊行〕名著刊行会 〔価格〕 現金価格 一八六、〇〇〇円

〔申込・問合わせ先〕 総発売元・株式会社 コーディック

東京事務所 東京都千代田区神田神保町一一四七

大森ビル TEL 東京(〇三)二九五一〇一八六

TEL 大阪(〇六)二三七一五三四一(代)

『幼児の教育』復刻記念懸賞論文募集

このたび、雑誌『幼児の教育』復刻を記念して、左記の要領で論文を募集することになりました。多くの方々が、優れた論文をおよせくださいますことを、期待しております。

として行ないます。尚、名前入りの原稿用紙は御遠慮下さい。

一、賞金及び賞品 最優秀賞一名 賞金二十万円

二等賞 二名 五万円

三等賞 三名 一万円

参加賞 全員 記念品

最優秀論文は、本誌に掲載いたします。

一、問合わせ及び応募先

〒112 東京都文京区大塚二一一一 お茶の水女子大学附属

幼稚園内 日本幼稚園協会『幼児の教育』編集部

し、四百字詰縦書き原稿用紙に四十枚以上百枚以内。上表紙に「復刻記念懸賞論文」と朱書の上、「論文題目」「姓名」「住所」「所属」を記入のこと。審査は上表紙を外し、本文のみを対象

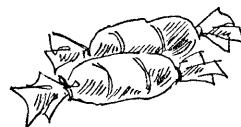
一、復刻『幼児の教育』を素材として、独自の考察を試みたものであること。

一、応募期日 昭和五十五年九月末日まで

尚、電話での問合わせは御遠慮下さい。郵便でお願いいたします。

主催 『幼児の教育』編集部
後援 株式会社コードィック

高層住宅での保育



八森佐知子

私は現在五歳の娘と十二階のビルの七階に住んでいます。初めてこの家に入った六年前には、多くのビルを見渡せるのを目新しく感じたり、空中に浮かんでいるような不安定さを感じたのですが、今では慣れてしまい何とも思わなくなりました。親にとってここでの生活は、交通の便や買い物の便が良く、無駄な動きの少ない生活で利点が多いと言えます。

しかしそこで生活する子どもにとっては、利点もありますが子どもの年齢によって不向きなところもあり、親にはそれを補う心づかいが必要だと思います。

不便を感じたのは、子どもが歩けるようになった一歳頃から幼稚園に通うようになる三歳迄でした。まず一戸建ての家のように

玄関からすぐに道路に出られないで、近くの家に一人で遊びに行くことが出来ない、庭や道路で遊べないので遊びが限られることがあります。さらにエレベーターや階段での登り降りが危ないため親がいつもついており、親の目が行き届き過ぎること、高層住宅では家というより部屋の集合であり、親の都合で出不足になると、子どもは密室に閉じこめられた感じになり、外に出たがって騒ぐようになると、などもあります。親はなるべく子どもを外に連れ出して遊ばせることが大切だと思います。庭がないため土や砂や水で遊ぶことが少ないこともあります。我家ではベランダにペビーバスの砂場を作り、ホースで水を出して遊べるようにしたり、風呂場で水遊びをさせたこともあります。しかし子ども

もが幼稚園に行き始め、水遊びや、泥、砂遊びが出来るようになつてからは、ベランダで遊ばなくなり、止めてしまいました。現在は、果物の種を植えたり、四季の花や野菜を植木鉢で育てていますが、娘は喜んで水をやっています。

マンションは空間を最大限に使つてるので無駄がほとんどありません。廊下が暗かつたり、ぽかんと出来る空間がないので、家のイメージが一軒家のイメージと違うと思います。合理的空間で生活している子どもには、さかさまの非合理的な、どろどろとした遊びが大切だと思います。娘の通つている幼稚園では、水や泥などで思いっきり遊ばせてくれるので、子どもはとても喜んでいます。

集合住宅の子どもは、友達が出来やすい利点があります。家が近いことや、ほとんど同じ環境なので行き来がとてもしやすく、食事をしたり、夜まで遊んだりすることもよくありました。

子どもが幼稚園に行き始めると、友達の家に寄つたり、公園や図書館や児童館や小学校などで遊び出すようになり、高層住宅に住んでいる不満は少なくなつてきました。このようになつてくると、高層住宅に住んでいるという束縛よりも、都会に住んでいる束缚の方が強くなつてきています。

私達は娘が四歳になる前も自然の中に連れ出していたのです

が、その頃は東京に帰つて來ても文句を言いませんでした。しかし四歳を過ぎると、大都會らしさを理解でき、三ヶ月滞在したサンフランシスコから日本へ帰るのを非常にいやがつて泣いたり、スキー旅行のバスの中で、東京に帰るのがいやだと一時間以上も泣き続けました。娘はサンフランシスコのゴールデンゲートパークやヨセミテ国立公園でリスにピーナッツをやり、何匹ものリスに囲まれて時を過すのが一番好きでしたが、東京に帰つて来てからは、東京は車が多い、人が多い、道路が狭い、草や木が少ない、きれいじやないなどと親がびっくりするほど都會の悪口を言うようになりました。スキーの帰り道で娘がスキー場に住みたいと言うので、大好きな幼稚園はどうするのと聞くと、ここから通えばいいと言います。そこでパパの仕事で東京に帰らなくてはならないと言うと、パパも自分とここから一緒に電車で通えばいいではないかと提案していました。東京に帰つて來ても、思い出すと涙ぐみながらスキーに行きたいとか、サンフランシスコに帰りたいと何回も言つており、スキー場は春や夏には雪がないのと言うと、なくともいいから行きたいと言います。

なまじ都会的な環境にいるために子どもには自然との出会い、生活がとても大切であると非常に感じており、その機会をなるべく多く与えていくのが親の努めだと思っております。

高層住宅に住む子どもたち

ZDEFGJNPS
NOAKEDTKH

近藤千恵子

父母会に出席したお母さんの顔を見ながら、「団地以外の家に住む子どもは、四人に一人と云う感じかしら」と思う。

改めて、一五五人の園児について調べてみると、一〇五人の子どもが高層住宅に、五〇人の子どもがそれ以外の住宅、と云つても非常に手狭で自然の恵みのない住宅に住んでいることがわかった。

此の様に貧弱な住宅と周囲の環境の中で、成長期の子どもを育

てるのはどれ程苦労の多い事かと想像するけれど、若い母親達は「下の家から電話で注意される事があつて……。子どもにはかわいそうだと思つても、つい厳しく云つてしまふんです。」

聞いている方が悲しくなつてしまふのだが、母親達はその事に悩み過ぎたら生きていけないとでも云う風に、意外とさばさばと云つてのける。言外に「だから此の幼稚園に通つている」という気持ちがあるようでもあった。

四月に入園した三歳児の母親は、

「この発育の良さが苦労の種子でした。部屋の中では発散しきれないで団地の公園へ遊びにつれだします。すると、他の子をいじめるわけではないのですが、とにかく力があつて……。公園でも、いけない。いけない。と制限を与えてしまつて、やりたいだけやらせられない毎日でしたから」と話された。

「ポンと飛び降りたらいけないんですよ。下の部屋に響いてしまうから。」

このような家庭生活の中で、生来の子ども達のエネルギーッシュ

な活動力は、思う存分發揮できる場をもたないまま中途半端にし

ぽんできてしまっているのだろうか。

私は幼稚園の中でこそ、一人一人の子どもがやりたい事を、や

りたいだけできる生活を保障してあげたいとしみじみ思う。

保育者が、きまりやねらいを大袈裟にかけなくとも、子どもたちは自分のものとして使える時間と空間との、そしてともだちの中でも、充実した調和のある生活を創ることができる。

三歳、四歳、五歳、どの子にとつても砂と土と水を使う遊びは楽しい。それは素材のすばらしさと共に、コンクリートジャングルに住む子ども達の中に潜在する欲求かもしれない。水が砂に穴を作る様子を、いつまでもじーっと見ている子どもたち。

自分達の作った水路を、水が流れ進んでくる興奮に顔を赤くしながら、真剣な共同作業を続けている。立派にできた山やトンネルに、惜し気もなく水を流し入れて、めちゃめちゃに壊してからあそびを終りにする。

雨降りの翌朝、庭にできた水たまりをつないで川を作る。雨が止むのを待てずにはじめる事も多い。水たまりの前に腰をおろして無心に泥をこねる。チョコレート工場のつもりが、一変して泥の手型をプレゼントしあう遊びに発展してしまう。追つたり追われたり、文字通り泥だらけになつた子どもと大人は、互いにあそ

びきった事を了解しあう。

裏庭にしつとりと店を開いて続いているケーキやは、或る日公園迄探検を行つたときを集め、本物の紅茶をいれようと話しあつた。子どもの気持ちは「ごはんも炊きたい」と高まつたが、火を燃してみると、レンガの上のヤカンはみる見る真黒になるのにお湯はなかなか沸かなくて…。開店サービスの日はおかねなし、明日からおかれをとつて、だんだん高くしてもうけようと云う子ども達の意見だった。幸いよく繁盛している。

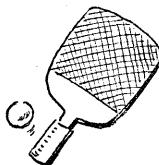
高く積んだ跳び箱の上から、下のマットに向つてヒラリと跳びおりる子どもは、きっと一大決心で空中に第一歩を踏みだすのだろう。マットの中に無事着地した時、満足そうな頬笑みをみせる。とび方を変えたり、仲間に新ルールを発表したりしながら、飽きずに疲れずに繰り返していく。

基地ごつこと呼ばれる遊びは、机の上に机、その上にまた机や椅子を重ね、棒や紙やクレヨンや、様々ながらくたをその中へ運び込む。まるで、動物たちが自分の巣の中にするように。こども達は、此の基地にのぼったり、降りたり、もぐつたりしながら遊びのイメージをひろげている。

こども達のあそびには、現代生活の抑圧を自ら開放している部分があるようだ。

(東京・まんとみ幼稚園)

高層住宅と子どものあそび



林 美智子

先日「幼児の教育」の編集部から、高層住宅があふれるについて、そこに住む子どもたちが、どのような遊びをするか、又その遊び方や、遊びのしさが昔とは違っていないか、違っているとしたらどのような変り方なのか、等について、これから取り上げてゆきたいが、先ず現在の幼稚園での子どもの遊びの様子はどうなのが、書いてほしいという依頼を受けた。

丁度「高層住宅と子供の発育」

少ない幼児の外遊び

実は、ここ数年前から子どもの遊びを見ていて「この頃の子どもは、なんとなく違う、どうしてこうなのかな?」と疑問を持つことが多くなっていた。

例えば、今まで楽しそうに遊んでいたかと思うと、急にヒステリックになつて乱暴したり、目まぐるしく遊びを変えたり、イライラと落着かない子がいる。又極端なほどに外へ出たがらない子もいる。これらの原因の一つに、高層住宅の生活が影響しているとはいえないだろうか。

母親はキメ細かな配慮を
という日本経済新聞（六月の夕刊）の記事を読んで一日程した時
であった。

昔の住いの開かれた環境とは違つて、閉ざされた中での生活のストレスの「抜けぐち」がこういう結果を生みだしていく、大人にとっては、みはらしのいい、機能的で住みこむのよい高層住

宅も、子どもにとってはそうとばかり云えないようである。

例えば、東京工業大学社会工学科助教授の原芳男氏は、「高層に住む幼児は、戸外よりも、自宅の部屋や棟内の階段・廊下で遊ぶことが多い。そして部屋にいるときは、テレビの視聴時間がどうしても長くなっている。そのために、母親が連れ出してくれる

以外、自分では外に出られない一歳半から二歳半のテレビ視聴は、幼児のなかで最高となり、高層の子どもは低層の子どもよりも、全年齢を通じて長時間になる傾向がある」と述べている。(日本経済新聞)

事実、幼稚園での子どもの遊びの中にも、テレビの影響は強く反映されていて、子どもたちによく見るテレビマンガの主人公に、自分の身をおきかえての行動が多く見られるし、グループになると、怪獣こつこやガッチャマンこつこが盛んに行なわれる。年少児の中には、大きくなったら、仮面ライダーーやウルトラマンになりたいという発想もでてくる。

又大地をふみしめての外遊びよりも、室内遊びを多く経験してきた子どもたちは、幼稚園でも、まことに遊びや、絵を描いたり、何かを作ったり、絵本を見たりすることの方が得意で、体を動かすことを好みながらも、自分から、園庭に飛び出していつて、広い空間で活動することに対する興味の示し方がおそくなつ

ているのではないだらうか。

外遊びの経験の少なさと、自由に外に出られない不便さが、子どもたちの外遊びに不安を与え、子どもたちをそう云う結果においやつていると云えるかもしない。

「二階でござります、おおりの方はございませんか」

「四階は通過、五階はおもちゃ売場でござります」

「七階は食堂です、おりて下さい」

などと保育室の戸を開けたり、閉めたりするエレベーターひとつは、昔は見られなかつた遊びの一つである。戸の近くに押しボタンがはられ、エレベーター係の子どもが戸を開けるまで、みんな保育室の前で待たざる。以上は高層住宅が子どもに及ぼしたと思われるほんのわずかな例にすぎないものである。

この狭い国土を利用して住まさるを得ぬ日本人にとって、今後ますます高層住宅との関係は、密になつて来ると思われるが、その中に生活する大人が、将来にならう子どもの心の中に、自然に寄りそう日本人本来の姿を見失わせてしまつたり、大空に羽ばたくべき鳥を、小さな籠に閉じ込めてしまふことのないように、私たち保育者も努力しなければならないと思つてゐる。

(東京・音羽幼稚園)

西洋長屋の 浪人

竹内良雄



ある3DKの公団住宅に、兄貴一家の留守番がわりに住みついで早や四年たつた。引っ越した当初から、ずっと室内の壁はむきだしである。本来なら、洋服ダンスなどの家具がところ狭しとばかり並んで、壁は完全におおわれるはずである。ところがあいもかわらず壁がむきだしであるということは、家具一式を揃えて来てくれるひとが、何年たつてもいいことでもある。

ところで、団地生活は、わたしにとっていささか苦痛である。というのは、3DKの団地は、一家族が住むのを原則としていて、一人で3DKに住むというのは本来許されないため、近所の奥様方から冷たい目で見られるからである。そんなこと“我関セ

ズ”と言つて、生活を送つていけばいいのだが、そうもいかない。やれ管理組合の当番だ、自治会の総会だ、等々、隣り近所とつきあいが生ずる。団地住民としての最低の義務ははたさなければならない。そのため、万やむを得ず、奥様方の中に混つて相談会みたいなものに出席する。すると、どうやら噂のタネになるみたいだ。そのため、こちらも必要な時以外は、なるべく顔をあわせないように努力はじめめる。会社勤めしているなら、朝早く出で、夜遅くもどちらいい。だがわたしの場合は、家にいることが多い。しかも夜は遅く寝て、星近く起きる生活だ。昼近く、のそふとんからはいだし、洗面所へ行く。この家は一階なので、洗面場のすぐ外側が階段の入口である。そこはまた、この階段利用者十軒の井戸端もある。なにもそこに井戸があるわけではなく、この階段利用者の奥様方の井戸端会議をする場所なのである。

今日も、奥様方が二三人集つて井戸端会議のまつ最中である。朝食兼昼食を食べに行こうと思うが、そうすると、その奥様方のそばを通り抜けなければならない。夫を朝早く送り出した奥様方は、昼ごろになつて出てくる若い男を冷たい目で見るにぎまつている。仕方がないから、しばらく水を飲んで井戸端会議が終るのを待つ。“茶腹も一とき”というが、水を飲んで我慢する。もはや我慢も限界になり、洗面所へ行つて会議が終つているかどうか様子をうかがう。まだやつている。ちょっと聞き耳を立ててみる。

「……おたくのお子さんは頭がよろしくてようございますわね」

「いいえ、そんなこといひませんわ。おたくのお子さんもできるつて聞きましたわ」

「あら、そんなこと。でもねえ、先日、主人のお友達に先生をなさいする方がいらっしゃるの。その方はある団地のすぐそばの中学校の先生なんですけど、その方が主人にいいますのに、団地の子供達の成績はすべて平均化されているってことですわ。

なにかの科目にとくにはず抜けているという子がいないんですね。そういわれてみると、うちの子なんかもたしかにそうなんですか？」

「あら、そういうえばそうかもしないわ。なんででしょ？」

「その先生がおっしゃるには、やはり同じような家で、同じような生活をしているから、全体的にそうなってしまう、ということですね。そんなこと聞くと、あの子のために引っこ越して、一軒家に移りたいけど、なにせ先立つものがないものでしょ？」

「こちらも同じよ。早く一軒家に住みたいと思つてゐるけど、ペペの稼ぎが悪いから……」

子供の成績が話されているときは黙つていた人が急にしゃべる。

「隣りの棟のAさん、ご存知でしょ。今度、町田の方へ引っこ越すんですつて。土地が四十坪で、4LDKぐらいの広さなのよ。いいわねえ。子供が大きくなると、どうしても4LDKぐらいは欲しいわ。もうひとりくらい子供が欲しいと思つても、3DKじゃ

ねえ」

「あら、おたくの主人の会社、景気がいいことじやない。そろそろ引っ越すのじゃないかと思つてゐるのよ」

「ええまあ、そうしたいのですけどねえ……」

話は延々と続く。こちとらは早く終れと祈るだけである。

団地を西洋式長屋といった人がいたが、こうなると全く当つてゐる。さしずめ、わたしなどは、貧乏長屋に住む、傘張りでその日その日を送つてゐる浪人のようなものだ。

しかし、団地生活も決して悪いことばかりではない。カギひとつで生活ができる、気楽なところがある。家賃、管理費などが安い（今はだいぶあがつて、それでもないらしいが）。駅へ行くバスの便が多い。しかも日本家屋とちがつて、古くなつたからといって傾くことがない（だろう）。数えあげればきりがない。それでも、多くの人は喜々として団地を出て行く。ちょうど、抽選に当つて喜々として団地に引っ越してきたと同じようにである。やはり日本人にとっては、どんなに交通が不便でも庭つきの一戸建ての家がいいのだろう。団地はアパートから一戸建ての家の通過点のようである。

しかしあたしは、この団地生活からまだ抜けられそうにもない。また、なにがなんでも抜け出したいとは思つてない。とにかくその前に、この壁を隠す家具をもつて来てくれる人を捜さなければならぬ。

中高層住宅と育児

星 美智子

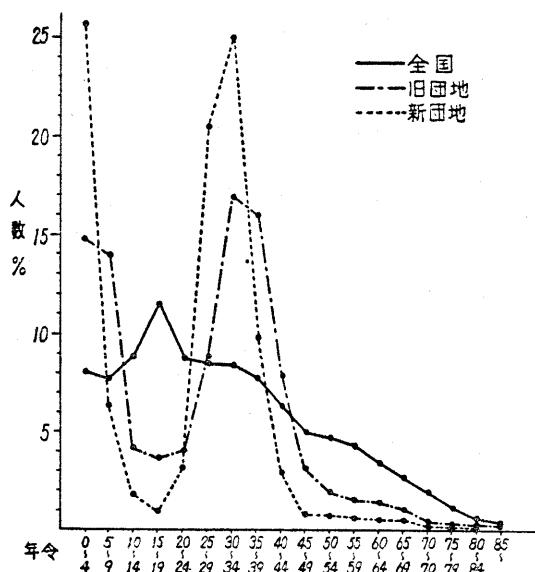
日本の高度経済成長とともに多くの都市への人口集中化、また、それに對処する住宅政策によつて、ここ二十年間に日本の居住環境は著しく変化した。すなわち、中高層住宅の激増である。その推移をみると、大きく三期に分けることができよう。

第一期 一九五五年に発足した日本住宅公団が、翌年から都市周辺に「2DK」を中心の中層（4～5階）賃貸住宅を建設し始めた数年間である。当時の一般住宅事情からみれば、この公団住宅は、水洗トイレ、ガス風呂、ステンレスの流し台——と、文化的生活のシンボルでもあり、その住民は「団地族」とよばれもした。

第二期 都市郊外に大団地が建設された六〇年代である。この時期は地方都市の公社も民間建設会社も中層住宅建設にあたり、中層住宅が急増した時期である。この間、「団地っ子」「鍵っ子」と子どもへの影響がとりあげられるようになった。

第三期 七〇年代には、「2DK」で誕生した子どもたちも小學生、中学生となり、需要とともに「3LDK」「4LDK」と一戸の面積の広さが多様になった。また、賃貸から分譲に主流がうつった時期もある。これはこの種の住宅への人びとの定着を意味するものである。さらに、この時期は、6階以上のエレベーター附帯の高層住宅の建設、建設地の市街地への移行、そして民

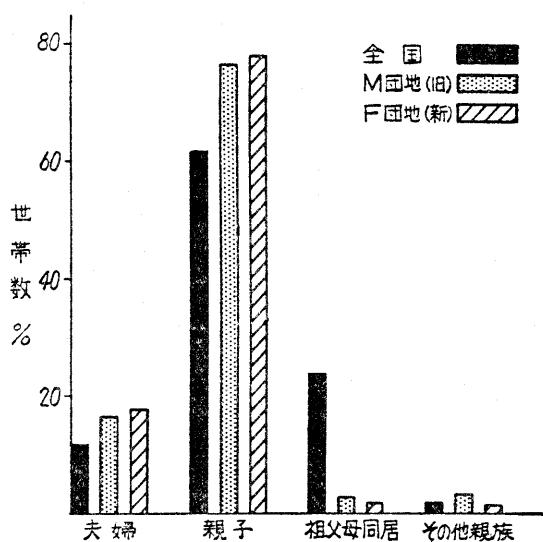
第1図 5歳階級別年齢分布(率)



間のいわゆる「マンション」建設ブームが特徴である。多様化の時期ともいえる。
以上のような居住環境を経ながら、中高層住宅人口は増加し、現在もなお増加しつつある。

さぐってみたい。

第2図 家族構成



大規模な団地やニュータウンは、人工的に急速につくり出された地域社会である。中・高層住宅が集合して特有の居住環境を形

団地の家族構成と育児

成している。われわれは団地の特殊性とこれら諸条件のなかで成長する子どもたちの実態調査をおこなった。そのひとつとして、

設立後十年の団地と新設の団地の居住状況を比較してみた。第1

図にみると、両者とも、親と子の年齢に二つの山をもつ分布で、二世代家族の姿を示している。新設団地は年齢が若く、団地の設立年度や居住空間に規制されて、同質的家族が密集していることを示している。また、祖父母同居家族は全国平均二四%に対して三%，子ども数は全国平均二・六二人に対し一・五八人と団地の核家族状況が明らかであった。

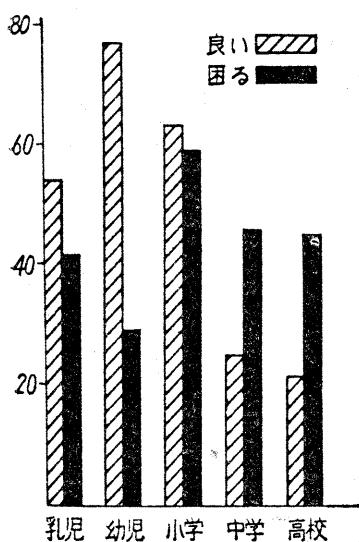
このような核家族化は、子どもへの期待や保護が過剰になり、脆弱な子に育てることにつながっていく。また、嫁・姑のトラブルがない一方、先行世代の経験を頼れず、育児不安をまねくことにもなる。しかし、核家族化は全国的な傾向ともいえる。団地の特性は、核家族化より、むしろ、同質家族ということであろう。つまり、生活水準・生活形成の類似した同年齢の親たち、そして同年齢の子どもたちが密集していることである。親同志のサークル活動、子ども同志の遊びなどながまづくりが発展する一方、互いの比較や競争なども問題となることが多いのである。

子どもの養育への影響

母親の意識調査から、「乳児」「幼児」「小学生」「中学生」「高校生」の五つの各時期にわけて、団地でのしつけ上の問題を検討してみた。

乳幼児期は、よい点の方が困る点より多く、小学校では、よい

第3図 しつけ上の良い点、困る点



悪いがほぼ同じであるが、中・高校時代では困る点が多くなつてゐる。

内容の詳細は割愛せざるをえないが、各年齢期とも、(1)環境、(2)設備(室内・屋外)、(3)人間関係(母親・子ども)、(4)家庭生活、(5)その他の項目ごとに、良い点、困る点をそれぞれ集計した。その主なものをひろってみるとつきのようになる。

乳児期——日当り、室内温度調節、騒音が入らない、泣いても気がねないなどの設備が良い。母親同志育児の相談ができる、他の子と比較できる、集会所の健康診断がうけられるのが良い。他の子と比較してあせる、芝生に入れないのが困る。

幼児期——屋外の遊び場の設備、友だちが多いのが良い。せまい、4～5階が危険、不便である。階下にひびくので子どもを叱ることが多い、他の子と比較してしまる、友だちのまねをする。友だち相互の家の出入りが多い、母親同士の関係がむずかしい。

小学校——母親同志が連絡、相談しやすい。留守番や合理的な生活をさせることができるのがよい。子どもの社会性がのびる。困るのは友だちと遊びすぎる、子ども部屋がとれない、せまくてのびのび育てられない、動物がかえない。

中・高校生——個室がとれない、親の生活と密着しそぎる、のびのび育てられない、家事手伝いをさせられない、屋外設備がな

い。

以上、団地生活と子どものしつけを考えると、団地の各戸の構造、広さ、設備が乳幼児に適していても、青少年にすみにくく状態であることが明らかである。この調査は2DKを中心の団地であり、現在は、おなじ中・高層住宅でも子どもの個室をとれる構造のものが多くなっている。一方、プレハブをとりいたれた最近の建築は、乳幼児期の音の反響が問題になつてきている。また、市街地の高層住宅では、幼児期に友だちがないことがなやみとされている。

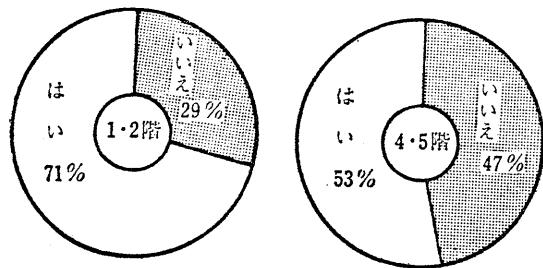
戸外あそびへの影響

1・2階と4・5階を対照して、3歳児の外あそびを比較すると、図のように、明らかに差がみられる。外あそびの一日の平均時間、平均回数も4・5階が少なくなっている。

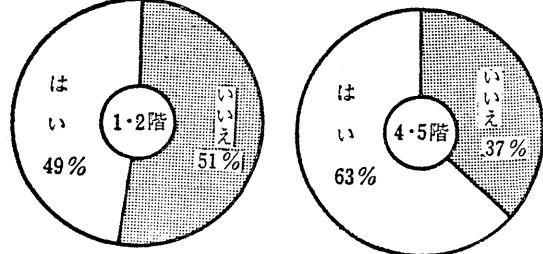
最近の高層住宅では、さらにつこの傾向は強くなり、上層階の子ども戸外あそびは消極的になつてゐると考えられる。

× × ×

第4図



第5図



中・高層住宅の特徴は、ドアのカギひとつで外部の社会から遮断されているという心理的条件がある。それは家族単位の孤立性ないし独立性の意識となる。一方、中・高層住宅は同質家族が隣接し密集しているのである。ドアの外に意識を向ければ新しいコミュニティをつくつていける。新しい生活環境は、新しい生活意識の形成を必要とする。中・高層住宅での育児の問題は、この親の意識の問題にかかわっているといえよう。

(日本総合愛育研究所)

『やわらび』から

学ぶこと

関口はつ江



本書は著者、川崎千束先生が二十四年間勤められた東京家政大学附属みどりヶ丘幼稚園を退かれるに当つて、先生の保育実践の成果と保育観人生觀をまとめられたものである。保育の在り方、方法を細やかに記した保育のための指導書であると共に、著者の自伝の書でもある。

保育の場に在りながらとらえた幼児の姿、保育者としての心でかい、生活觀がひとつひとつ出来事を通して述べられており、保育をするということが、こんなにも深い配慮のもとで、そして、深い喜びや哀しみにつながりながら行われるものであるのか、と目を見張る思いがする。全身保育に打ち込んで、保育をする者として生きることが、人間としての素晴らしい形成につながる事実を目のあたりにして、「保育」そのものの価値の高さを示す書としても大切な役割を果していると思う。

全部で十八章のうち、はじめの五章は幼児の姿と保育のしかたについて具体的な実践を記したものであり、六章から十六章までは著者の保育觀を中心にして海外の状況等も含めて、多角的に保育について述べ、最後の二つの章に自伝的なエピソードと書簡が載せられている。真に幼児のための保育を、と考えながらも、具体的な方策をもたずく悩んでいる保育者にとって、本書の前半の保育の進め方、幼児とのかかわり方の事例は貴重な助言である。多

少の理論的な枠組の中でこれらがまとまって示されるなら、この上ない保育者のための指針となる。

そこで、多分本書においては著書の望むところではないであるが、もしできることなら、各部分を独立した書としてもまとめることができたら、尚一層与えられるものが大きいものではあるまいか。本書の保育にかかる部分から学ぶところが大きいのであるが、読みすすむうちに、著者の素晴らしい人間性にふれ、その個人的、私的世界の中にひき入れられてしまい、ともすれば、自分の保育実践へと結びつける努力が失われるからである。

さて、本書を読まれた方にどこが最も心に残ったかと尋ねると、恐らく十人十色の答が返ってくるであろう。保育者は保育者なりに、それも経験の深さによって、母親は母親なりに、娘は娘なりに感じ方は異なる。それ程までに、保育の、人生の、人間の様々な側面が深く、暖かくとらえられており、美しく的確なことばで表現されていて、どこを読んでも、そこはそこでひとりの世界を作っていて感銘深い。

例えれば、「保育の基本となるべき」とが、冒頭、第一章「芽を育てる」に次のように鮮やかに示されている。

『……いかにもただただしくて指でも切りそうな子をみつけた。手伝うつもりでそっと手を出すと、色紙をひいて、「ぼくひとりです。お母ちゃんがねえ、なんでもひとりでしなさいって、いつたの。」いそいで手をひいてホホウとこの子の顔を見直した。——ふと、おうちでやはり鼻の頭に汗をうかべて洗濯していらっしゃるだらう健康そうなお母さまの顔が浮んできて、思わず心たのしくなる。

赤ちゃんをおんぶしたふだん着

鼻の頭の汗

お母ちゃんが……言ったの

この三つを結びあわせると、手をやくほどのいたずら坊やではあるけれど、この芽の健全さがおもわれる』

と、まず子どもについて何をとらえるべきかが、

『慰めるつもりで、こんなことを言つてみたものの、『ああ明日にでも、赤ちゃんを歩かせてあげて、僕とお母さんと赤ちゃんの三人を、ダーツと三越の正面玄関に立たせてあげたくなる。』と、子どもへの共感と深い愛情が保育の中心であることを、

『池袋で乗り換えるんだよ。』小生意気な坊やの言葉が続く。この坊やにこんなことがわかるのかしら、ちょっとためして見たくなつて「それからどういくの」と、うながしてみる。「それから

ね、たくさんたくさん行くんだよ。新宿の三越だもの。」池袋から四つめの新宿でも、この坊やにはたくさんたくさんなのだろう。

通りすぎた電車のひびきで三越行きを連想したこの子がいじらしい。』

と、更に子どもを知ろうとして働きかけて行くことが、子ども理解をすすめ、かかわりを深めて行くことを。

こうした基本的なことが具体的な事実の中で随所にみられる。一

般的な理屈で述べられないために、うつかりすると読み流してしまいうかも知れないが、ひとつひとつのことばづかい、心の動きに保育の中核があることに気づいて心にとどめると、素晴らしい保育の技術もまた習得できよう。

現在は、幼児の行うひとつずつの行為の意味を見出し、そこから保育をすすめることが大切であると理解されながらも、こうした実践はむずかしいとされている。それはなぜであろうか。

本書でごく自然なこととして行われていることがなぜ実践できないのであろうか。このようにみずみずしく幼児の活動をとらえ、豊かな活動をひき出すことができないのはなぜか。また、保育の場は、うごく、さわる、つくる、感ずるという具体的な出来事から成り立っていることが忘れられ、個々の行為や心のひだが切り捨てられてしまっているのはなぜなのか、こうした問いへ

の答を著書の姿勢の中から見出すことができるのではないだろうか。

人が自分の在り様を大切にせず、保育者が自分の感受性や行動を磨く努力を放棄して、科学的事実（と称せられる）や学問的な理屈に頼り始めた時から、こうした誤りが生じたであろうことが。

夏休みについて次のような文がある。

『まず疲れた肉体を充分にやすませてやりたい。よくまあきょうまで働きつけたものだとわが手足ながら撫でさすってやりたい。』

また、お子さま方と離れて暮している時に、おみくじの「凶」に不安にかられて夜半に会いに行かれることが書かれている。

このように、自分の心に素直に反応しつつ、自分が生身の人間であることを受け入れ、いとおしみながら、自分と、自分にかかる人達のために愛情を注ぐことから、人の心をとらえる的確さが生れ、努力への意欲が自然に出てくるのである。

現在の保育界の混迷が「保育者」を育てずに保育の技術や理論を求めるとしたことにあると思われる。なぜそんなに急

がねばならなかつたのかと悔いる思いがする。人を育てること

は、育てる側が自分を振り返りつつ、自分を成長させ、その自分を子ども達に分け与えて行くことである」と、その原点に早く返らなければならないと心が急ぐ。

まがいものの多い世の中で、本物の大切さも心したいと思う。

本物（私の本物、自然の本物）が本物の人間を育てることをいくつかのエピソードを通して教えられる。物については本物を与えることはむずかしいにしても、本物の心は与えることができるだろう。

『仕事のことは何もかも忘れて旅に出ましょと同じ職場仲間で早春の鞍馬路をぶらぶらと歩いたことがあつた…………。「あらはこべよ。おいしそうね。幼稚園のインコや十姉妹にたべさせたいわね」……「何もかも忘れて」ということは女性は、殊に子どもを育てる土壤のような保育者にはでき難いことらしい。』

常に子どもとつながっている、つながろうとするいつわらわる心。

心。

『風花が舞う静かな夜更に私は決意した。どんなに誹られようと、自分達の真実の生活を始めるために、子どもたちにも故郷を

捨てさせ、自立の生活に向おうと。』

自己をいつわらなすことによって、自己を全うするための知恵や力が溢き出ること、それはおとなも子どもも同じであること、本物の自分の生きる喜びや苦しさを子ども達と共に味わうこと、が教育することであることをあらためて考えさせられる。

保育の道を歩む者が、本物の保育者の声を聞かずに、一体何を聞こうというのであるうか。「保育」が「保育学」として他の学问と肩を並べようとする時、やみくもに他領域の既成の理論に依存して、己れ本来の在るべき姿を見失おうとしている今、本書の示していることの意味は大きい。

今後こうした保育者の手になる書物が後に続くことが、保育界のためにも、著者の永年の努力に報いるためにも待ち望まれる。

(郡山女子短期大学)

わらびの 春を求めて

野を歩く

齊藤美和

先生がH君との普段の生活の中で、H君の心もちを大切にして接していたからこそ発せられた言葉ではないかしらと、その光景を思い浮べて、ホッとため息をつきました。確かに、『飛びついてきた子ども』はさうきのあの時のことだけれど、普段心もちを大切にする祖母と孫との関係を持てない別の家であつたならば、こんなにめやさしい言葉を発することはないだらうとも思うのです。

田命い＝1＝

私が初めて川崎先生という方とお会いしたのは、『幼児の教育』の誌上のことです。

『ある三歳とその周辺』と題したその文章は、もちろん、『わらび』の二本の中にも掲載されています。

わらび、友達を求めて門のさくをのりこえたH君が、週に一回の集団生活の中に飛びこんだ（飛びこまされた）時に、喜んでいない「ぼくはだめな子なの」と、悲しい顔を見せたという。その彼が「○○さんさようなら、K君さんさようなら」と、降園時の様子を再演して見せ、その時に、いち早く彼が集団生活に溶け込んだことを知ったとか。「喜んで元気に行く」おばあちゃんの裏切りの言葉はあっても、月々たくさんのおどもと接しているおばあちゃんは、やはりH君の気持ちを受け止めてくれる場であったのでしよう。

電車いっしに夢中のH君のために、自動販売機で切符を買い求めH君に手渡すと、

「せがどかなかつたから 渡さなかつたの」と不審そうに言われたこと。私は、そんなH君の言葉は、おばあちゃんまである川崎

H君とのほほえましい、しかも深みのあるこの文章に接した時、私は、こんな素晴らしい方のお話を聞けたらと思ったものです。この時には、後に、実際に川崎先生と出会いしかもその元で

保育をするという幸せな日々を送ることになるとは、夢にも思わずいたのです。

平林寺のえんま様

出合い＝2＝

二十四年間お勤めになつた家政大附属のみどりヶ丘幼稚園を退任なさった川崎先生は、縁あって、埼玉のある私立幼稚園に園長として赴任なさつてきました。その園に私も、同じ年（五十二年）の四月から勤めることになり、銀髪の美しい上品な川崎先生に初めてお会いしました。

保育に関しては、小さなことにこだわらずあけっぴろげに子どもと接することを教えていただいたような気がします。細かい教育的配慮についてあれこれ考えるよりも、今その時の子どもとの生活に、全身を注ぐこと、かと言つて細やかな心づかいは、常に忘れていないのです。時間が間に合わずあわてて帰してしまつた子どものオーバーのボタンをそつとかけて下さつたり、楽しいもちつきの日、しまい忘れておもちをなくした子に「せつかくの楽しい日なのだから」とおもちを持ってきて下さいました。担任である私は「どうぞ」と、しまうのを忘れたのは彼だからと、心の狭い考え方しかできなかつたのです。

川崎先生が、保育者の研修のためにと勉強に私たちを出して下さり、その日の保育を引き受け下さつて、子ども達を、園の近くの平林寺に連れていくつて下さつた時のこと。川崎先生は、かねてからの持論どおり、平林寺の山門をくぐると、矢印の通りに自分で歩いていくようにと、子どもたちを離し、途中えんま様の前で立ち止まる子どもたちと「こわい目だね」と話し合つてから、又、三々五々に目的の地まで。その様子を見て「並んでいかない園児など見たことない」と受け付けの方が言つたとか言わないとか。「平林寺のえんま様は、後ろにも目があるのかしら」と笑つてお話しなさつたけれど、それ以来、「さわらび」の本でも触れていますが、私立の園において、保育の心を貫ぬくことのむずかしさを感じながら、時にその実態に苛立ちながらも、常に若い私共保育者の道標となつて下さいました。

母の心

私が、『さわらび』の本の中で最も感動して読んだのは、「花に

寄せて」の章と、お嬢様との手紙のやりとりをかかれた章です。

「主人を肺炎で亡くされたことは、お話にも聞いてはおりましたが、この本を読んで封建性の色濃く残る地方の婚家を、三人のお子さんを育てるためとは言え、どんな思いで出て行かれたのだろうかと、生意気なようですが心中察するに余るもののがございました。

勉学に励む子のために、夜食をつくつてあげられずとも、なお本ものの母の心を持つてお子さん方を育て上げていらしたことに深く感動したのです。

まだ母になれないでいる私は、もし母になれたなら、働く母の背中を見せながら、しかも小さな肩寄せ合つて暖かく生きていける家庭をつくっていきたいと思いました。

おしかり

「臨時だけれど、いい所があるのよ。頑張って保育の道を歩いていれば、きっといつか拓けるわ」との川崎先生の暖かいお言葉。「私としては、ずっと保育の道を歩いていきたいのですが、家の方でちょっと問題があつて」と何とも恩知らずな私の言葉。

「もう、私は知りませんよ」

思つたより以上に厳しい先生のお言葉に私は初めて、保育の道を歩こうとする人間にはいい加減が許されないことを知りました。

この三月にわけあって、二年勤めた園を去つた私に、大きな課題を預けて下さつたのです。

春を求めて

川崎先生は、園長をおやめになつて、淋しいのではないかしらと、お聞きしたら、「いいえ、ちつとも。私は、これからぜひひ花開かせたいことがあるから。内緒だけどもね」といたずらっぽく笑つてお話しになりました。

川崎先生は、まだまだ素敵なお春を求めて、お元気な足で歩いていらっしゃいます。決して、若い人の重荷にはなりたくないといふ自分のしつかりとした足取りで。

私も、美しい銀髪になるまでも、子どもと共に歩いていかれたらと思います。

(浦和一女附属幼稚園)

こどもと共に生きる



森岡和子

数がふえスピードも速くなつてゆく。

公園住宅の五階の窓から下を見る。今しがた降りて行った小さ
い三人兄妹が、団地の遊園地にある砂場とブランコに、それぞれ
所を得て遊んでいる姿が見える。土曜日も午後三時を過ぎると学
校帰りの子ども達も多くなり、歎声がこだまのようにな響いてく
る。団地のこの一角の広場だけでも三、四十人はいるであろう
か。

一年生になつたばかりの兄の姿が見えなくなつたと思うと、や
がて自転車を乗りまわしている三、四人に混つて力一杯ペダルを
踏んでいるのが見える。五階のこの窓に気付いたのか片手を離し
て振つて見せる。四十世帯のはいった建物の周囲を回る自転車の

ふと気が付くと、遊園地のブランコや砂場の付近の様子がかわ
り、先に遊んでいた子どもは姿を消し、メンバーが替つている。
はつと思つて目を転ずると、二人の姉妹はいつの間に行つたの
か、向う側の住宅の建物との間から見える隣接した造成地で、赤
土の斜面を大きいこどもにならつてになり降りている。腰にダンボ
ールの切端を敷くことを覚え、片手にそれを持ち、片手で大きく
伸びた草にしがみつきながら登つて行ってはになり降りる。何回や
れば満足するのか、はずむ鼓動と息づかいがこの窓まで伝わつて
くるようだ。小さい方は己が限界に気付いたのか、さつきと遊び

を変え草の中を飛び歩いている。虫でも追っかけているのだろう。

勢い込んだ足音とドアの音で兄が駆け込んで来る。虫籠を手にするともう駆け降りてゆく。大きな殿様バッタを捕えたとか。

どうやらばらばらで遊んでいた三人が虫取りで一つになり、捕えた虫の処置で困り兄が五階まで駆け上って来たようだ。“降りて行って見てやらなくていいのか”と母親に聞く。“いちいち降りて行つてたら大変、この間も団地育児の先輩にそのことで笑われた”といふ。

太陽が西の公団住宅の向うに傾き遊園地も半ば陰りつて來た。虫籠を自転車のハンドルにぶらさげて、兄が意気揚々と引きあげてくる。小さい妹が四階に住む四、五年らしいというお兄さんの自転車に乗せてもらつて続く。やがて補助車のついた黄色の自転車を押して上の妹が建物の下へ繰り出してくる。また一しきり自転車のグループが後になり先になり建物を回る。

気が付くともう遊園地や広場からの歓声は止んでいる。空の色に氣付くのか夕方の肌寒さに時間を知るのか、また家から呼ばれたことでの行動に引かれてか、潮の引くように人影がなくなつてゐる。造成地の方も草がなびいているだけ。三人の小さい兄妹の足音がコトコトと階段に聞え次々と帰つて来る。上気した充実感

のあふれる顔で……。あれだけのことでも達が夕暮れた各棟・各階のそれぞれの同じ型の住居へまちがえもせず帰つてゆく。吸いこまれるように、見えない糸に手繰り寄せられてもするようにならぬから窓に灯がある。ほつとした思いで我にかかる。

……。

棟々に薄やみが忍び寄る。そのやみの不安をかき消すようにあらわにちらの窓に灯がある。ほつとした思いで我にかかる。

の工夫で始まつた遊びが次々に展開し、面白さに時間を忘れ暗くなるのも気付かず集中して遊んだ昔の遊戯集団のような姿は見かけることが出来ません。団地のこども集団は人数が多く、エネルギーは充分に燃焼し、生き生きとした歓声は揚り、たしかに昔のこどもとちつとも変わらないようではあります、丁度大きな集団の並行遊びのよう、個々ばらばらのよだな感じで、遊戯集団のみんなが一人一人を知りつくし、リーダー的役割から世話をされ可愛がられる役割まで、それぞれが地位を得て自己を出し切つて係わり合い遊びを作り出してゆく、いわば社会化された遊びが展開しているような様子はあまり見られません。——旅行者として短い期間、しかもごく主観的にかい間見ただけでいいきれるものでないとは思いますが……。——

考えてみますと、私の小さかった頃はこども集団だけではなく、古くから住みつきまた何らかの係わり合いを持ち、地域集団として大人同士も知りつくし認容し、お互いに手を差し伸べて生活していたようです。その生活実態がそのままこどもの遊戯集団に透していったのではないでしょうか。今日の団地のように高層化し孤立化した住居状況で、核家族中心のしかも仕事に追われ他を顧るいとまのない個々の生活の背景で、昔のような遊戯集団をとりもどすことは至難のわざかも知れません。

保育の目的は、「乳幼児の全面的な発達を援け社会適応をすすめ、既存の文化を継承・維持し、さらに創造変革し社会の発展に寄与出来る者の基礎を培つてゆくこと」その通りでしょう。しかしもしこどもを、今日築かれている文化、この社会への適応準備の時期としてのみ見るならば、彼等は社会の成員として見られていないことになりはしないでしようか。こども達が社会の枠外の存在としてしか意識されていないような現実に気付かされることがあります。社会は大人とこどもによって成り立っており、こどもも社会の成員の一人として社会生活を享受し、それぞれの発達に応じ生き生きと社会的生活を充実させることが大切です。社会適応や性格形成・しつけという大義名分のもので、現在最も必要なことの生활の充実が追いやられ、大人の都合や思わず、社会的生活規範による大人の言い分で処理されてしまつているようなことがないといえるでしょうか。

幼いこどもにとって社会的生活の充実はどういうことでじょうか。生き生きと輝いた目、好奇心あふれ意欲に満ちた活動、遊びの喜びや目的達成のために、仲間と共に労を惜しまず体験を共有しあう姿、そのなかに生命の喜びと躍動、生きる彼等の証し

を見ることが出来ます。

原初的基礎的な欲求が充分に満された時、全ての感覚が外へ向

つて開かれあらゆるものを吸収してやまない零歳児。初めての出

合いによって結ばれた母親との絆、その絆を基地に探索活動でもつて自己の生活領域を拡大してゆこうとする一歳児。大人の目からは目的も何も見出せない活動を、失敗しても繰り返し父親のように母親のようになると志向する二歳児。遊びのなかに自分の能力やイメージの顯現を見て歓喜し、安定した母子関係を土台に、信頼感をもつて仲間との係わりを築きはじめる三歳児。仲間と共に知的 세계を拡大しようと未知のことがらにいどみ、課題意識をもつて遊びに取りくもうとする四歳児。自分の遊びの目的が仲間のものとなり、仲間のそれを自分のものとして、共有した目的と遊びで感情体験を一つにし、その連帯感から生命の充実・喜びを実感する五歳児。以上のような生れてからの人間社会においての経験が、こどもを更に次元の高い社会的にむかって意欲的に取りくめるような人間に成長させてゆくのだと思います。私共保育者は、その土台の過程でどうこどもと係わり、共に生きる社会の成員として姿勢をとつてゆけばよいでしょうか。自閉的なこども、登校拒否児や意欲的でないこども、更にこども同志の連帯感が薄れ一緒に遊べないなどがうんぬんされる今日、両親はもとよりこ

どもについての仕事に係わる私共、いや全ての大人の今日的な命題であると思います。

それでは一体、私共大人はどのような時に生命の燃焼・生の実感を得ているでしょうか。川喜田二郎氏はある教育論のなかで、「人間というものは物事を達成するという体験がないと、本当の人間らしさというものを持たない」とあります。人間らしさといふことを実感としてつかみ取れない動物である。達成体験で人間らしさを実感した人間は、自分の生きている世界にみずみずしさを感じ、喜びを感じ更にファイトを燃やして何かをやろうとする。一言でいえば生き生きすることである。そしてそれは人間の心を開き、人間同志の連帯を生むのみでなく、その心情は更に自然や物的環境にまで及ぶ」ということを言っておられます。

達成体験なくしては人間は本当の人間らしさを実感することはできないということです。それとともに私共は達成の過程でその努力や労苦を支える背後の力を感じ、成就の瞬にはそれが何かの役に立ち達成の喜びを共にする者がいることを思うことで、生の充実を実感し積極的に生きようとする生きがいを与えてゆくものだと思います。

「達成する」ということが、外界から情報や知識をインプットし

て、自分の力で加工処理してアウトプットへ持つてゆくことであり、インプットからアウトプットへとフルコース経験されたとき、「やつた」という達成体験が得られる」と川喜田氏は述べていますが、幼い子どもほど、毎日の生活をそのように生きていると言えるのではないでしょうか。

発達のなかで獲得していく経験や能力を一杯を使って、新しい経験にいどみ、今までに得た知識や情報、体験を彼等なりに再構成し遊びの中に実現してゆく。その過程と成就感を通して得た喜びを大人に分かとうとし、仲間同志共有し連帯感を強めて更に意欲的な活動で未知の世界へわけ入ろうとする。私共の保育（幼児教育）もそこに焦点をあわせて進めてきたと思います。このごく素朴な原点に改めて目をそそがねばならなくなつたことは、今日幼い子ども達にとって大切なことが忘れられてきているからではないでしょうか。

幼い者はほど人間らしく生きようとし、みずみずしい感受性と生きる喜びで連帯感を育て、自然の中にその感性をとけこませようとしています。彼等のそのような生活へ大人は立ち入つてこま切れにし、教育のための教育、合理的な保育で、かえって人間らしく生きる姿みずみずしい感受性を奪いとつているようなことはないでどうか。幼い父母親が多くなったといわれます。将来大

人になつた時よい仕事、よい暮しが確保できるようになると、勉強一すじによい中学よい高校よい大学を目指して受験体制の波に乗せられて来た彼等のなかには、幼い時からの達成体験が少なく精神的成長もとげ得ず、子育てにゆきづまり、或は始めから回避してこどもは保育所や幼稚園へ入れさえすれば育つようと思つてゐる者が出てくるのも不思議ないような思いにとらわれます。保育所や幼稚園に課せられている問題の重みを実感として感じさせられます。

*

*

私自身が子育てを始めた頃から感動をもつて今も心に留めている詩があります。

一つのときは 何もかもはじめてだった。

二つのとき 僕はまるつきりしんまいだった。

三つのとき ぼくはやつとぼくなつた。

四つのとき ぼくは大きくなりだかつた。

五つのとき 何から何までおもしろかつた。

今は六つで ありつだけおりこうです。

だからいつまでも六つでいたいと ぼくは おもいます。

素朴な短い言葉の中に乳幼児の姿、大切な発達のポイントがおさえられています。短い一行が多くのこと語り息づいています。詩人は本当にこどもと共に人間らしく生き、共に感じそのみずみずしい感性でこどもを見、この詩が生れたと思います。こどもに近くその息吹を身に受けつつ生きることなくしては、この詩は生れなかつたでしょう。こどものそれぞれの姿の背後に、発達と共に係わつて来た大人の姿が見えるようです。

私共はこどもを社会の成員とし、私共とともに人の世を歩むものとしなければならないと思います。大人自身がその生活のなかで自らの達成体験を通して人間らしさを実感し、そのみずみずしさをとりもどし、こどもとの共感と体験の共有を、じくささやかな身近なことで折りにふれもつこと。このことはこどもとの係わりだけでなく達成体験から得られるもう一つの面、大人同志の連帯感、人と彼との属する組織（地域集団）への連帯感を育て、こどもたちが有機的な係わりの中で社会化された遊びの展開が望める遊戯集団の、母体となる新しい地域集団が団地のなかにも作られるのではないかでしょうか。

大人とこどもの係わりは、その発達とともに現象形態は変つて来ます。しかしこのようにして幼い時から結ばれてきた絆

は変りません。共に生きる実感をとらえつつ、大人もこどもと一緒に人間らしく、母親として父親として、また保育者として成長してゆきたいものです。

社会の成員として共に歩んだこどもも、やがて私共から巣立ち、またそのこどもと歩みはじめます。レバノンの詩人カーリル・ジバンは、今世紀の初めに、あなたは弓、こどもは生きた矢だ、と詩っています。充分にひきしばられた弓と矢は一体です。しかし射手（神）は大能の力でその弓を曲げ、はるかかなたにその的を見て矢を放つのです。そこは弓である私共のとうてい訪ねてゆくことの出来ない明日の家なのです。詩人は最後にこう詩っています。

射手の手の中でひきしばられることを喜べ
射手はとびゆく矢を愛するように

しっかりとまえられた弓をも愛するからだ。

地上に生れ出た脆い生命が大人との係わり合いのなかで成長し巣立つてゆくまで、それは二十数年に及ぶ長い道程です。が充分に引きしばられた弓の役割を果したいのです。とびゆく矢を愛しその弓を支える大能の力のもとで、正しく文化が伝承され社会は創造的変革をとげつつ受け継がれてゆくと思います。

遊びと子どもの発達①

〈顔・手・指の遊び〉

加 古 里 子

生れた子どもに、遊びという生活行動が出てくるものとなるものは、脳幹によって司られる原始反射である。⁽¹⁾ モロー・逃避・瞬目・口唇・追視・抱握・自動歩行などと分けられたこれ等の外部刺戟に対応する反射的行動は次の意識的習慣的な成長するに不可欠な愛撫・授乳・摂食・認知・把握・歩走等の諸行動を形成してゆく。従っていわゆるスキンシップとか母乳授乳は新生児にとって重要なばかりか、成長のふみ石といつても過言ではない。この重要不可欠な事は、親や大人が新生児に対して抱くいとしい、可愛い、守護してやろうというごく普通の愛情によつて巧みに成就されるようになつてゐる。

きりしている顔への注視や、指や腕、全身に対する愛撫庇護行動によつて、次への発展をきずいてゆく。

たとえば新生児は体軀に対し頭部の占める比率が大であり、目の位置は下である。従つて頭部ながんずくおでこが大きく、そして狭い産道通過時の配慮の為か鼻が小さくひくい状態にある。親や近親者はこの新生児が、普通の出来うれば親以上のみめよき顔かたちに成人した時にはなつてほしいという願いを抱く。それでその赤児のおでこをさすり、鼻をかるくひっぱつてとなえなどのような歌をうたう。⁽³⁾

へでびでび ひつこめ (ひたい)

子どもの遊びの第一歩は、こうした親や大人の対応により、ファンツの研究⁽²⁾に見る如く最も人間的な感情表出のこまやかではつ

はなはな のびる (はな)
或いは「もみじのよう」としたとえられる両手をひらいたり、

にぎりたり、なめたりするようになると、

へにあにあにあー (にぎり)

へ大道 大道

(ひたい)
(鼻)

へあんあんあんあん

(両手を上げひろげる)

ちよここと ことこと (のど)

へシヨンシヨンシヨン
あんあんあんあん

おシヨンシヨンシヨン
(拍手)

（両手）

と手の動きの遊びをつたえる。

やがていろいろな動作や行動があえるに従って、

へカンブリ カンブリ いやいや (顔の回転)

へかいくり かいぐり とつとの目 (両手と目の動作)

へはらポンボコ はらポンボコ (腹)

へちょらちょらアワワ (口・発声)

といった単位機能的な遊びが行なわれる。そしてそれは顔あそび

の中で最も素朴単純でありながら最も大きな効果のある、

へいないいない ばあー

いないいないい ばあー

となつてみのつてゆく。そのみのりは、

へいこは とうさん にんじる (右の頬)

じいこは かあさん にんじる (左の頬)

いい子のおかおは にんじる (両の頬)

ひるばを通つて
一本道ぬけて
池のまわりの
がけの下を
こちよこちよこちよ
へとんとん どなた
こうやのねずみ
おやまあ おはいり

という皮膚の接触と刺戟、それによる快感や満足、及びその反応をみたい為にくりかえし行なわれる反復の間、そのことばと、リズム、ここやよい霧雨氣が子どもに与えられる。こうした場にあまりに強い精神主義や、フロイト的な性意識論は不適である。それは單に体の部分刺戟のみではなく、或いは單一的解釈で処理できるものではなく、言葉や表情や、変化する状況を伴つた综合体として対応発展する場すなわち遊びの崩出定着となつてゆくからである。それはやがて次のような発展をとげる事となる。

へくさはらぼうぼう

ひるばを通つて

一本道ぬけて

池のまわりの

がけの下を

こちよこちよこちよ

(のど)

(頭)

(鼻)

(肩)

それじや こちよこちよ

(わきの下)

へおてらのかげから

かいだんのぼつて

(手)

こちよこちよこちよ

(腕)

へ二階へあがらしてや

(腰)

屋上へあがらしてや

(頭)

やねにおろさしてや

(肩)

かいだん下つて

(胸)

コッチャコッチャ

(わきの下)

もつらいこまでになると、もうそれまでの赤ちゃん遊び、あやさ
れ遊びではなく、自分や相手の体の一部を使つたり示しながら、
物語りのような発展や首尾一連の道ゆきをたどる間、言葉や形状
や動作やらによる「まとまり」の面白さを認識するようになる。
その面白さを満喫したいために、言いにくい事を自分に適するよ
うになおしたり、理解が不充分な点をぴったりするようにする。
或いは順序をかえたり、それにふさわしいものを添えたりして、
各種の「身辺身近」な遊びがつくられてゆく。

最も身辺にあって身近なものといえば、手や指である。誰にも

あってどこへでも一緒についてくれて、厄介にもならず、い
たつて簡便である。忘れる事もないし、しまい込む手間もいらな

い手や指こそ、遊ぶ折の用具や道具として、こんなにいいものは
ない。こうして「顔あそび」によつて誘発された子ども達は、
「手や指の遊び」を楽しむ事となるのである。⁴⁾

「こどもとじどもがけんかして

(小指)

くすりやさんとめたけど

(薬指)

なかなかけんかはとまらない

(中指)

ひとたちやわらう

(人差指)

おやたちやおこる

(親指)

という指合せこつこや、両手の指をくんでフクロウやザザエやカ
エルの形をつくる指組み遊び、この中には手によるおふろ遊びと
いうものがある。左右の指をからめて脱衣場・ひき戸・流し・浴
槽・沸しきなどを作るのに難易により四種の作り方があるが、そ
こへ、一本指の客が来り、三本指の湯舟につかり、その時の指の
しめ具合によって「あついかぬるいか」の問答となり、ぬるけれ
ばわかし、あつければぬめるという所作がそれに続くという演目
がくりひろげられることとなる。子ども達にとってそのやりとり
と、指の接触感覚が大きな楽しみの源泉となる。

また指や腕による各種のバツ遊びがある。

（手の甲）

（東京都）

ガリガリ区

ハリサン町

ツネ子さんが

ペチン

(叩く)

(指でつづく)

(ねる)

といつて相手の片手をだんだんといじめてゆくとか、イタチ・ネズミ・ヘチなどと称して、手の甲を次々とつまんでだんだんと高くみ上げてゆく遊びがある。

或いは指頭・指間の個所によって、名前、天候・運勢などをうらなう遊びが数多く知られている。それらは

『天国・地獄・また地獄』(吉・凶・凶)

『貧乏・大尽・おお大尽』(凶・吉・吉)

『晴・晴・くもり』(吉・吉・中)

『雨・雨・くもり』(凶・吉・凶)

『地獄・極楽・また地獄』(凶・吉・凶)

『極楽・地獄・また地獄』(吉・凶・凶)

『よい事・わる事・大わる事』(吉・凶・凶)

『わる事・よい事・大よい事』(凶・吉・吉)

というように、それぞれの吉・凶の頻度と交替リズムが、皆それぞれちがっている点、大いに注目に値する所である。もうひとつの種のものの中に、

『エチ・ケチ・ペー

というものがあって、それらはいずれも色欲・金欲・名譽欲をあらわしているというように、救いがないというか現実社会の鏡といふか、おそるべきがつたるものがあらわれて来ている。

しかしした指や手の遊びは、それを遊ぶことによつておもかめに指をつかひこなし、まげからめ、折つてゆく間、巧みに意図通りに駆使する器用さを見につけでゆくと共に、その意図通りに指をうごかす時、形態やことはや、願いをこめることによつて大脑を動員させるという智的な行為を、たのしみをもつて遂行していた事を知るのである。それは子どもの心身の成長に、大きな影響を与えていた筈であろう。もちろん誰も数量的に把握した者は幸か不幸かいないようである。

(引づく)

引用文献

- 1) 黒丸正四郎・三宅廉「新生兒」日本放送出版協会(昭46)
- 2) FANTZ, R.L., *The origin of form perception*, Scient. Amer., 204 (1961)
- 3) かい・おむ「子どもの遊び」大月書店(1975)
- 4) 加古里子「子どもの遊びを考える」教育評論3111号(1975)

◇園長室の窓から◇

原 口 純 子



「幼児教育は大切だ」とか「幼児教育の重要性」等々といふことが、さまざまな場で、しばしば言われる。しかし、その割に幼児教育の本質は理解され尊重されているとはいえないのではないだろうか、「重要性」が強調される、といふことは、逆に言えば、無視され、軽視され続けてきた証とも言えよう。——だれにも自明な小学校教育の重要性を今さら一所懸命強調することはあまりないのだから——

教育は、行政の面ですら、「幼児教育の重要性」とか「三つ子の魂……」などと口先では重要がって下さるが、実際にはよく理解されておらず、実質的には軽視されているのではないかとさえ思われることがある。

もつとも幼稚園に関する行政は市町村にまかされている部分が多く、地域差も大きいから、「私のところでは」という方が適当かも知れない。

ここで私の知っている公立園の例をあげながら本質的に幼児教育が重視され、尊重されるということはどういうこ

幼児教育に対する認識の甘さは、単に親の無理解とか、世間の無理解ということのみに限られるのではない。幼児

とかについて、現状の問題点をあげて検討を加えたい。

○量と質

就学前の就園率（保育所をも含めて）の低いところよりも高いところの方が、児童教育に熱心だという具合に、行政面では、児童教育を重視している度合を数量的に見ることがある。このような場合、一般的には、児童の就園率の高揚をもってその成果が上ってきていると判断されるであろう。高い就園率があれば、行政的には、実があがつたと考えられるというわけである。確かに、行きたくても行く園が無いというのでは困るし、だれでも児童期にふさわしい教育を受けられることはありがたいことである。量的な面では近年非常な前進を見たと言つてよいであろう。

ここでは、数の上での「重要視」を認めた上で、園をあずかっている当事者の立場から、実質の面で納得しがたい運用がなされていることを指摘し、質的向上の必要性を明らかにしたい。

まず、「幼稚園」や「児童教育」は、教育行政の面で、他の教育機関である小、中学校とは比較にならない程軽く

扱われているようと思われる。このような差異は、単に義務教育とそうでないものの差によるものではなく、児童教育そのものに対する認識のしかたによるもののように思える。

○「兼務」の教育

国公立幼稚園長会に出席してみると大部分の園長は五十歳以上の男性であることに気がつく。このように国公立幼稚園の場合、園長はほとんど小学校の校長が兼務しているというのが実態である。兼務の園長ではたしてどれぐらいの人が、本気で児童教育のあり方を考え、思索し、研究し、職員の保育について指導をおこない、保育内容や計画について論ずることができるだろうか。内容、方法、その他実質的面に對しては教頭、主任にまかせて、帳簿や服務などに關する指導をして、その任をすませる場合が多いのではないかと思われる。

公立の場合、小学校長の異動に連動して幼稚園長も変わること、「今度の園長はチョークの持ち方と板書のしかたを指導してくれた」とか、「環境の整備が大切だといってます

第一に黒板を全部ぬりかえた』等の話を時折耳にするだけ、どこか幼児教育にとってピントの合わないものを感ずるのはいたしかたのないことだろうか、また、熱心な兼務園長は、主任にまかせず、教育要領をざつと読み、六領域をそつくり教科のようにとらえて、ガッチャリした時間割の

ような教育課程を組んで、現場の先生が困りはてているという話を聞いたりすることもある。あまたある兼務園長の中には幼児教育を十分理解され、すばらしい保育を指導されている方ももちろんいることと思う、しかし兼務制には制度に伴う問題点もあるのではないかだろうか。

幼児教育百年といわれる今日、数の上では飛躍的に伸びたものの、保育そのものがいつこうに育たず、遅々とした歩みを続けている。これはさまざまな原因があるうが、保育を考え、指導すべき立場の園長を兼務ですませてきたことにその一因があるのではないか。

園長自身、よろこんで兼務しているというより、若干の手当といっしょに幼稚園をおしつけられて、その任を負わされているというのが実態ではないだろうか。

兼務が多いのは、人権費の節約と、人材不足をカバーするためのものと考えられる。しかし、できる範囲からで

も、園長の専任化をすすめ、同時に園長になりうる人材を育していく必要があろう。この意味で、今後、四年制の大學生を出た男性、女性の採用をすすめていくことも一つの取りべき方法であろう。

○園長の仕事

同じ園長といつてもピンからキリまである。私の近くの他の公立園では園児数は二四〇人、学級数は六あり、二年保育をおこなっているが、職員数は園長と教諭六名、その他職員（用務員）一名の合計八名である。一人の先生がかぜで休めば園長はたちまち保育に当らなければならぬ。一日や二日はともかく一週間ともなればその負担は大へんなものである。事務職員もいないから、物品購入の伝票の切り方、役場との行き来、来客の応対、P.T.A.その他の渉外、経理、それに加えて、プリントの仕事から、はては手が足りなければ、草ぬきやガラス掃除までしなければならない。その上本来の経営管理・保育の指導など一切の仕事が園長のかたにのしかかって来る実状にある。小学校で六年級二四〇人といえば、単級で小規模であるにして

も、教頭も事務職員もなしということはないと思う。もつともどなりの市ではほぼ同じ規模の幼稚園でも教頭も事務職員も、担任外の教諭も、専任園長もいるのだから、園長が事務職も、雑用も、時として保育も兼務しているのは私のところの特殊事情かも知れない。

一日中、事務と雑用にありまわされて、手いっぱいになり、充実した錯覚をおこして、これ以上保育のことなどとても考えられないという本末顛倒が起ってしまう。これで兼務同様、園長不在の園になりかねない。

事務職員や、担任外の職員等、必要な職員の配置がのぞまれるゆえんである。

○一クラスの人数

昨今、研究会のテーマに「ゆたかな人間性を培う教育」とか「ゆとりと充実」ということばを聞く、いかにも耳ざわりのよいことばである。しかし、一クラス四〇人の定員の方はそのままで、スローガンやテーマだけが伸び伸びとしているのはどうしたことだらう。

現実を振返ってみると、四歳児が四〇人一クラスにい

て、一人一人の自己充実とか、ゆたかな人間性を培つたりすることが可能なのだろうか。行政の不備が現場の先生や子どもにしわよせされているといえよう。にもかかわらず、先生方は、保育内容をよくしよう、一人一人の子どもに充実した経験を持たせようと汗みどるになって動き、努力し、反省しつつがんばっている。先生方の涙ぐましい努力の上に日本の幼児教育は成立つてゐるのである。幼児教育がよい効果をもたらすためには一学級の定員は多くても三〇人から三十三人程度におさえることが望まれる。

○職員の給与

教諭にその経験にふさわしい給与が支払われることは大切なことだ。私の住んでいるところでは、本年度採用された人はどうしたことか六年経験のある人も四年経験のある人も等しく三号俸しか与えられていない。女の人が給与の査定が低いと文句をつけると「お金にこだわる人だ」などと小さな町ではたちまち悪評が立つたりするが、私は自分の労働や経験にふさわしい代價を請求することはいささかもみつともないことではないし、当然のことだと思う。ま

た低すぎると給与は働く意欲にも影響して、力いっぱいがんばらうと思えなくなつてくる。

市町村における職員の給与の実態及び具体的な運用を県または国は把握しているのだろうか。ついでにいうなら、私のところでは、条例にないとの理由で、園長に管理職手当も支給されず、責任だけは一人前に負わされている現状である。

私などは地域社会の幼児教育の向上への意欲と情熱でひたすら奉仕している気持であるが、情熱などといふものは揮発性に富んでいるからそう長くつづくものではない。適切な賃金のうらづけのない労働は時として情熱を失わせ、ことなれ主義のマンネリ化へとおしながす原因となることを自治体の責任者は認識すべきであろう。

○指導主事

行政が幼児教育にかかる具体的な施策は、予算と人事が中心である。

上は文部大臣から末端は各園の教諭の採用人事まで、人事は行政の要の一つである。公立園の場合、文部省—県教

育庁—各教育事務所—教育委員会—幼稚園、という指導の系列は強力で明解である。上からの「指導」一つで現場は右へも左へもゆすられる。

各園を巡回して具体的な園の保育の指導に当る指導主事が、どうしたことか、幼児教育の専門家ではなく、この春まで中学校の校長をしていた方で、異動によつて事務所に入り幼稚園の担当になつたりしている。「幼稚園は初めてですがどうぞよろしく」などと挨拶されて目を白黒するのは現場である。任に当られた先生もさそし困惑されたことと思う。付焼刃で勉強はするものの、現場に「指導」に行つて帳簿やはんこのおし方、書類の整理などについては指導できるが、保育についてトンチンカンな質問や指導をして、先生方のひんしゅくをかつたりする。根のやさしい幼稚園の先生に「幼稚園は初めてですって、しようがないわよ」などといわれて、時として指導を受けて帰つたりする。

こういうことがごく普通に見られることから考えると、どうも行政が本気で幼児教育を重視しているとは考えにくいと言わざるをえない。人材は確かに少ないかも知れない。しかし、本気で探せば一つの県に何人かは幼児教育の

専門家がいるのではないだろうか。

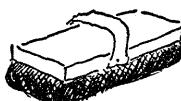
○もつと現場の声を聞いて下さい

私の住んでいるところは人口流入の激しい新興住宅地域である。従つて新しい園が次々と新設されるのであるが、園の設計にも、設備・備品等物品の購入にも、現場の声はほとんどとりいれられない。園舎は超モダンで斬新な設計で、一億何千万とかけた、壁も天井も立派な建物ではあるが、保育室から園庭が見えないように設計されており、子どもも先生も生活しにくい構造になっている。このような建物は、現場で保育に当る者の立場から非常に望ましくないものである。

保育とか、幼稚園の実態をまるで知らない設計者が、今までにない、夢のような、きれいでかわいい幼稚園を設計したとしか思えない。お子さまランチのような建物は子どもにとってもありがたいものではない。建物が今後二十年から三十年は使い続けるものであることを、考えると、設計は幼稚園教育の専門家の意見を取り入れて、もっと慎重に行なってほしいものである。

○むすび

これまで私の幼児教育への関心は直接の保育行為についてのものであった。保育方法、保育内容の改善こそ、幼児教育を向上させるものだと考えてきた。しかし立場が変つてみると、それらはたしかに欠くべからざる大切なポイントの一つではあるが、とてもそれだけでは解決できないことがわかつた。より根本的な人事や予算を司る行政のありかたに、無関心では済まされない重要な問題があるよう思ふ。幼児教育に対する行政面からの深い理解を切に願うものである。



水と子ども



川上美子

はじめに

昭和四十九年四月、五歳男児Kは地域のM幼稚園に來た。年中組で一年間過ごし、翌年Kは就学猶予をし、そのまま年長組に持ち上った。私は二年目に、クラスの複数担任のひとりとして、保育に携わった。Kの幼稚園での一日は、ほとんど水遊びで終始した。当初保育者の指示には耳をかさず、数少ない集団活動にも無関心で、自分の思うまま、好きままに活動していた。他の人に拒否されたり、活動を阻止されるとひどく乱れ、荒々しい行動となつた。Kはこのように、まわりの人や物が自分の都合通りになつてゐる自分の狭い世界に住んでいた。私のKとの一年間の生活

は、試行錯誤の連続であつた。私には、人が他の人にどれだけ深

くかかわり得るかという問い合わせもあった。その当時は、来る日も来る日も同じような水遊びに、どうか一時でも別の遊びに目を向けてくれないものかといろいろと試みたり、また思いかえしてKの水遊びの意味を探ねようと思つたりすることを繰り返した。その後四年を経て、記録を読み直してみると、Kの好んでした水遊びに、Kの成長の跡が刻まれていてることが知られた。

以下、Kの水遊びに焦点を当て、"Kと子ども達の水のかかわり"さらに子どもにとっての水、砂遊びの意味を考えたい。

一、Kのひとり遊び

(記録)

四月のはじめの数日間、Kはほぼ一日中ひとりで黙つて水

遊びをする。場所は、子ども達があまりこない砂場である。

Kは大きな洗剤の容器（以下、ポットと記す）を片手に持ち、その中に水道の水を入れる。そして別の入れ物に移しかえ、余りは下にこぼす。又砂を取り、上からポケットの水をかける。……

私は横にしてKのまねをしようどし、他の入れものに水を入れると、すぐKはそれを取って自分のポットに入れてしまふ。

Kはこのような活動を何度も繰り返し、没頭して遊んでいる。単調で閉鎖的な水遊びである。私もKと同様な活動をしようとするが、私のくんだ水はKに取られ、ポットに入れられてしまう。私は横にして、Kと遊ぶというより、Kの思うままにされている思いがする。水も、Kの手によって移しかえられたり、砂を流したりする。私も水も、Kによって機械的に操作され、自由な動きは制約されている。

Kが水遊びをする時、常用している大きなポットは、いわば壺である。ユングは、「壺は、産み出し、あるいはすべてを呑み込むものとして、最も普遍的に太母神の象徴となっている。」と述べている。Kの心を捉えているこの容器は、自分を無条件に抱きか

かえてくれる母の象徴といえる。Kは人に対する関心は少ないけれども、この容器への並外れた愛着によって、自分を包みこんでくれる存在をむしろ欲していることが知られる。私は、これに対して、Kの水遊びにできる限りつき合い、彼の思いを受けとめるよう努めた。

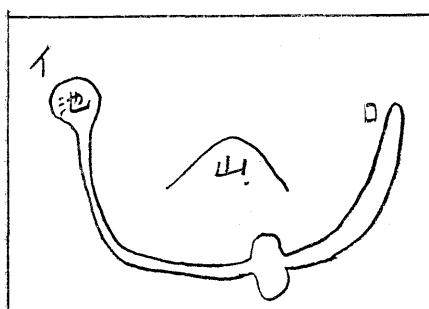
二、子ども達の所へ

（記録　四月十六日）

この頃になると、Kは日当りがよく、園庭の風通しもよ

い、子ども達が集まる砂場に来て水遊びをするようになる。

私はクラスマスの子ども達と遊びながら、時おり園庭にいるKの所へ行く。Kの方も、私を目で追っている。Kは、前述の遊びの他に、砂場にできた水たまりにポットの水をドボドボといぼ遊びをしている。



私は砂場に来て池を掘り始める。別の子ども達が作つていた水路と続ける。砂場は図（前頁参照）のようになる。Kは、イの池だけでなく、口のあたりまで、水道からポットにくんだ水を流す。他の子ども達もいつの間にかやって来て、水を注ぎ入れている。

Kは、子ども達のいる所、見える所に来て水遊びをするようになる。一の遊びのように、閉鎖的な場所で自分ひとりで遊ぶよりも、自分と同じように遊ぶ子どもがいる所を好むようになる。私が横で遊びを見ていると、Kは“いつものように”と言わんばかりに私の腕を動かして促す。また年中の子ども達がそばで水遊びをしていると、強引ではあるが、腕でその子どもを抱く。水遊びは、ひとりよりも仲間がいる方が、Kには楽しくなつたのである。

記録の場面は、さほど活発に発展した遊びというのではない。しかし砂場は、山、池、川（水路）ができ、風景ができる。水も流れている。子ども達もじだいに加わって来て、子ども達も動いている。Kも広く砂場を動いて水を注いでいる。ひとり遊びの時には見られなかつた動きである。水の方も、一のようKに操作されるだけでなく、水 자체で動いている。この場面は静かで

はあるが、生き生きとした自由感が漂つてゐる。水、砂は子ども（人間）にとって不思議な力を持つた物質である。精神分析では、水は無意識の象徴と言われている。水は、子どもの心の奥深い所に働いて、何かを呼びさし、解放させる力を持つてゐる。そして、この心の奥深い領域を共に持ち合うことによって、お互の心が深い所で通じ合える。

私のかかわり方は、Kを含む子ども達の水砂遊びがおもしろく、持続するように心を配つた。Kが保育者や子どものいる所で楽しく水遊びをすることは、Kを最も満足させ、自己の存在感を確かめ、さらには他の人との心のつながりを生むことになるのである。

三、子ども達に支えられて

五月に入ると、Kは心が乱れることがしばしばあつた。Kの水遊びがうまくできない時、つまり、愛用のポットが見当らない時、また雨で私が充分にKの水遊びにつき合えない時、また水遊びトラブルが生じた時である。Kは日常生活においても、子どもに「ダメッ」と言われたり、たたかれるまねをされるだけでも気持が動転してしまう。自分に好ましくない事態にぶつかると、すぐ自分の存在が脅かされる程の危機的状態になつてしまふ。自分で

気持をコントロールすることができず、たいてい私にその乱れた氣持をぶつける。私は、Kを抱いたりおんぶしたりして、Kの氣持が静まるのを待つより仕方がなかった。こういう事態が生じるのは、無理からぬ理由がある。以前の場合は、自分の都合で動く世界にいたので、自分の思い通りに水や人を動かせた。しかし、水遊び等で他の人と接するようになると、自分の都合だけで動くと他の子どもと摩擦が生じるのは当然である。Kにとって、子ども達に混じって水遊びすることは楽しい。しかしその所は、子ども達とぶつかり合う所でもあった。

Kがこうした事態を自分で処理し、乗り越えていくのは困難で、幾度も乱れることを繰り返した。こうした過程の中で、まわりの子ども達の支えは大きかった。

具体的には、(1) Kが幼稚園に来る前に、例のボットを二つ見つけて、「Kが喜ぶから」と言つて水を入れて置いておく。(2)ボットが見当らないと、先まわりして捜してくれる。(3)他の子どもがボットを使っていて、それをKがほしがると、話をつけてそのままに譲つてもらう。(4)ホースを水道につないで他の子どもが遊んでいると、Kはホースをはなして水を使い、そのままにしておく。まわりの子ども達はホースをはずさるといやがる。それを見たある子どもは、Kが水を使う度に、ホースをはずしてや

る。これらの行動は、子どもがKの気持を察知し、自分から自発的にした行動である。Kと子ども達がいろんなトラブルを起こしながらも、子ども達が共に育っていく姿は、保育者としてうれしいことだ。Kの方でも、クラスの子ども達に対し、以前のように強引なやり方ではなく、自分の顔を友だちに近づけて、やさしく親愛の情を表わすようになる。

四、友だちといっしょに

(記録 七月二日)

Kは朝来るとすぐ水遊びを始める。砂場のそばでは女児達がおだんごを作っている。砂場では、男児達がカイジュウを使つて遊んでいる。

男児M「Kちゃん！」と呼ぶ。

K「はい！」と答える。

M「こっちに水入れてよ」

Kは言われた所に、ボットの水をボタボタと落とす。

子ども達が少なくなり、シャベルが三本散らばっている。

私はそれをシャベルかけに片付ける。するとKは、そのシャベルを取つてまた砂場のあたりに置く。

昔、まだ水道が各家庭になかった頃、川や井戸端には人々が集

飲ませる。

まり、なごやかな交流があった。それと同様に、水のまわりで子ども達は、それぞれ遊びは違っていても、何か心の交流があるようだ。

この頃、クラスの子ども達はいろいろとKに声をかける。Kはしきりに「はいはい」とうれしそうに答える。記録の中で、Kがシャベルをあつた所へ置いたのは、友だちと遊んだ霧雨氣、余韻を残しておきたかったからだ。Kはもうクラスの友だちに混じつて遊んでいる。

五、困難を乗り越えて

(記録 七月四日)

どうしても愛用の容器（この頃はむしろ小型の容器を好み）が見当らない。Kはしだいに乱れていく。私と二人の男児は捜すがない。私はKをしばらくおんぶすると、気持ちが少し落ち着く。そして、雨が降っているのを見たり、雨だれを手で触れたりしていると、気持が収まる。まもなくお弁当の時間になる。Kは私の体にピッタリくつついて食べる。また自分のお弁当やお茶を、私に食べさせ、

大きさは小型になったものの、愛用のボットがないということは、Kにとり自分を母親のように完全に受け入れてくれる存在がないということである。今までであると、ボットがないとひどく乱れたものであった。しかしこの日はじめて、この困難な事態を乗り越えることができた。Kは、容器がないという事実を受け止めることができるようにになったのか。愛用の容器がなくともするようになったのか。

私は、徐々に落ち着いていくKをおんぶしながら、物に受容されるのではなく、私（人）に自分を委ねていくKを感じた。その後お弁当の時、Kは自分の食べ物や飲み物を私の口に入れる。これは、Kがボットに水を注ぎ入れる活動と同様のものである。つまり、私は自分を受け入れてくれる人として位置づいているのである。その後、私に甘えることもあり、私の名前も口ばしされがあり始めた。何がなんでもという固さが和らぎ、Kはほがらかになつた。水遊びも鼻歌まじりでする。家でも、幼稚園のおかえりの歌を口ずさむようになった。まわりの子ども達も、Kがこやかな時は特に、ことばをかけたり、Kとふざけ合つたりする。ボットにしがみついて水遊びをし、自分の思い通りになる世界

にいた時は、他の人は無関心か、あるいは自分を脅かす恐怖の対象であった。ところが水遊びを通して、他の人と遊ぶ楽しさを知つた。しかしそれは、今まで気づかなかつた他（人）の世界との直面であり、その世界との摩擦を余儀なくした。言い換えれば、

この摩擦によつて、自分とは違う、自分の思い通りにはいかない、他の世界を知つたといえる。そして、今まで述べてきたように、Kの心を捕えている水遊びを、友だちや保育者に混じつてする中で、Kは他の世界をKなりに認識していく。自分にとって快、不快によつて事態を判断することが少なくなる。また、他の世界は、単に自分に危害を加えるものではないという認識によって、Kは新しい出来事や人に対する極度の恐怖心は和らいだ。Kが愛用の容器がなくともすんだという背景には、こうしたKの心の変化の過程があるのである。

六、水に入る

(記録)

Kがはじめて水の中に足を入れたのは六月十九日であった。この日砂場は水びたしになり、大勢の子どもが中に入り、私も入つた。するとKも泥水の中に入り、足を動かし、見ていた。六月の下旬からプールが始まつた。私はKを抱い

て入る。はじめKは少しこわがるが、しだいに慣れていく。友だちのしぶきがかかるといやがり、私にしがみつく。しかし、プールの中でとびはね、ごきげんである。

ここでのKの水とのかかわり方は、四月の頃、黙つてあまり動かず、水を操作していたのと全く違うものである。Kは体全体水に漬かつて、水を感じている。体を解放して、水に委ねている。つまり、自分の捉えうる範囲で世界と一方的に接触しているのではなく、その枠をはずして世界と交流している。この事は、Kの世界（自然）に対する見方、処し方で、画期的な出来事である。

おわりに

この幼稚園は、子どもが自由に遊ぶことができる幼稚園である。Kはここで、幼稚園生活の大部分を水遊びで過ごした。Kに限らず水遊びは、多くの子ども達が好む遊びである。水、水遊びの子どもにとっての意味は、測り知れなく大きい。私は、ひとりの子どもが水遊びをめぐって、保育者や子どもとさまざまな出来事に出会いながら成長していく姿を、捉えることができた。

(日本総合愛育研究所)

* 河合隼雄著『ニング心理学入門』(培風館) 九二ページ。

近ごろ、幼稚園などで、自分から遊びを見つけることができない子どもに出会うことが多くなったようだ。いろいろの機会にそういう子どもの家庭での様子を知つてみると、高層住宅の七階、十階というようなところに住んでいることがしばしばある。このことは私だけの経験ではなくて、いろいろの人から似たようなことをきかされる。先ごろ、オランダのユトレヒト大学に行ったとき、そこの教育学の教授が、最近、生れたときから高層住宅で生活している子どもが増加したために、子どもの遊びが変化してきたと力をこめて私に語られた。ユトレヒトのように、緑が多く、公園も沢山ある町でも、高層住宅に住む小さい子どもは、自分ひとりで下においていて緑のある広場までゆくことができない。だからユトレヒトの街でも、幼児が自分から遊ぶことができなくなってしまったといふ。私たちからみると、東京よりもはる

かに恵まれた環境であると思うのに、似たような話をきいて驚いたのである。

こうした幼い子どもの家庭生活環境の変化は、幼稚園の生活にまで影響を与えるのは当然であろう。本来、二、三歳の子どもが経験しておくような、子どもから発したとりとめのない遊びや、自然物と戯れて遊ぶようなことを、幼稚園でやらなければならぬのである。幼稚園の果す機能が、急激に変化しつつあるようを見える。このことは今日だけではなく、くりかえし着目して研究すべき課題であると思う。川上美子氏の水と土の遊びの研究は、この観点からも意義がある。

今月から連載される加古さとし氏の遊びの研究は、昔から遊ばれてきた遊びの資料の集成として期待されるものであら。

(T)

幼児の教育 第七十八卷第十号

十月号 ◎ 定価二五〇円

昭和五十四年九月二十五日 印刷
昭和五十四年十月一日 発行

112 東京都文京区大塚二ノ一ノ一
お茶の水女子大学附属幼稚園内
編集兼
発行人 津 守 真

112 東京都文京区大塚二ノ一ノ一
お茶の水女子大学附属幼稚園内
発行所 日本幼稚園協会

108 東京都港区三田五ノ一二ノ一
印刷所 図書印刷株式会社
101 東京都千代田区神田小川町三ノ一
発売所 株式会社 フレーベル館
振替口座東京九一一九六四〇番

◎本誌御購読についての御注文は発売所フレーベル館にお願いいたします

※万一製品不良本がございましたら、おとりかえいたします。

楽しく遊びながら ことばに対する興味や関心が高まります!!
集中力を養う玉入れゲームが付いて、楽しさが2倍になりました。



キンダーかるた① なぞなぞ

★プラスチックケース入り 300円

文・伊藤海彦 絵・原田 治
健康的でゆかいな、なぞなぞがテーマです。遊びながら、ことばのリズムや考える力が身につき、ことばや文字への関心が一層深ります。

キンダーかるた② おはなし

★プラスチックケース入り 300円

文・槇 昭志 絵・高橋 経
日本民話をはじめ、世界中の童話を集めて構成しています。楽しく遊びながら、童話の世界への興味が増し、ことばや文字への関心が深ります。

キンダーかるた③ せいかつ

★プラスチックケース入り
250円

文・まどみちあ
絵・竹山のぼる

現代っ子の生活がテーマです。幼児の心をみごとに表現した文と明るい絵で、いろいろな遊びや基本的な生活習慣を学びとれるように編集されています。



キンダーかるたⒶ 世界の童話

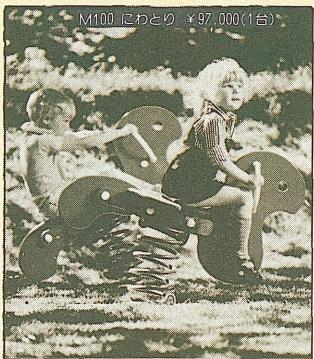
★プラスチックケース入り
250円

文・川崎 洋
絵・岡本信治郎

楽しい世界の童話がテーマです。
情操を豊かにしつつ、ことばや文字への関心が一層深ります。



フレーベル館が贈る 世界の特選遊具



デンマークのコンパン遊具



美的環境を創造し、新しい「遊び」の世界へ誘うデンマーク生まれの「コンパン」遊具。

子どもと環境の美しい調和を求める。コンパン社の「遊具」は、デンマークに於て数々の賞に輝いています。

- あらゆる安全への配慮が、なされています。
- やさしく美しい、新しいデザインです。
- 品質が良く、耐久性に優れています。

写真のM100 "ニワトリ"ほか ●価 格

¥97,000～¥865,000.

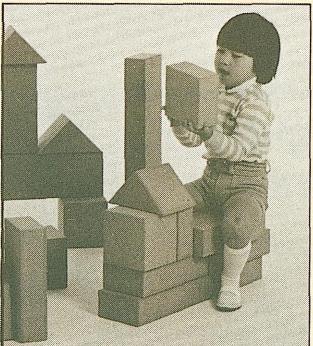


新しい創造性を育てる西ドイツ生まれの大型ブロック



- 知情操の発達と、肉体機能の発達を考えてつくられた遊具です。
- 丈夫で強く、落としても、乗ってもこわれません。アームには鉄芯が入っていて、折れることはありません。
- 落ちついた味わいのある色あいです。
- いろいろな物への展開ができます。

Aセット [695個] Bセット [440個] Cセット [255個]
¥130,000. ¥85,000. ¥50,000.



軽くてソフトな手ざわり
年少児のために開発された積木です。

コルク積木

- 0歳児から4歳児の子ども達も、今までにない大きな積木で自由に遊べます。
- コルク材を使用しているため、ぶつからっても痛くなく、軽くてソフトな手ざわりは、年少児にもぴったりです。
- 基尺が小型箱積木と同じなので、組み合せて遊べます。
- 特殊構造により、強度及び安全性に優れています。

発泡材の上のコルク材
で作られています。

1セット(24個) ¥39,000.

くわしくは、フレーベル館代理店・支社・支店・営業所・または本社営業課(03)292-7781(代)にお問い合わせください。